創立五十周年記念誌

平成二十七年

砺波准看護学院

50年のあゆみ

砺波准看護学院

砺波准看護学院歌

桐沢奨二　作詞、作曲
金守道子　編曲

一、みよ砺波野の雪間より
萌え草の芽のたくましく
あゝその若き力もて
看護の花を咲かせなん

二、あげキャンドルを高らかに
愛の灯あきらけく
あゝその誓詞おごそかに
看護の訓守りなん

三、いざわが友よ学院に
清く明るく眉あげて
あゝその希望果てしなく
看護の道に励みなん

四、いま医王山に光みち
庄川の水滔々と
あゝうるわしき人の世に
看護の真心捧げなん

お祝いのことば

砺波市長
夏　野　　修

公益社団法人砺波医師会砺波准看護学院が創立50周年の記念すべき年を迎えられましたことに対し、心からお祝いを申し上げます。

貴学院は、昭和40年に「富山県医師会附属砺波准看護学院」として設立されて以来、これまで半世紀にわたり900名を超える優秀な准看護師を養成されてきました。

このことは、歴代の学院長をはじめ教職員の皆様、関係各位のご尽力の賜物であり、卒業生が医療機関等の第一線で活躍し、地域の公衆衛生の向上に寄与されていることに深い敬意と心からの感謝を申し上げます。

さて、我が国は医療技術の進歩、生活水準の向上等により、世界に冠たる長寿国となった一方で、急速に進行する少子高齢化により世界に類を見ない急激な人口減少社会へと突入いたしました。いわゆる団塊の世代が75歳になる平成37年には、県内でも高齢化率が高くなかった砺波市においても30%を超えると見込まれています。

このような状況のなか、砺波市では平成25年3月に「砺波市健康プラン２１（第２次）」を策定し、健やかで、心豊かに生活できる社会の実現をめざして、一人ひとりが望ましい生活習慣の実践に努めながら、地域ぐるみの健康活動の推進を目標に掲げ、健康寿命の延伸と生活の質の向上に取り組んでおります。

この目標実現のためには、医療・保健・福祉・介護が連携した地域社会を作っていくことが大切であり、地域医療を担う医療機関が果たす役割と、医療の安全・安心を支え、患者のニーズに合わせた看護を提供する看護職への期待はますます増大しています。

一方で、ライフスタイルの多様化による生活習慣病の増加、疾病構造の変化に伴う医療技術の高度化、在院日数の短縮化による在宅医療の推進等、看護業務は一層複雑になってきています。

貴学院におかれては、この50年の歩みを契機とし、このような時代の要請に応える知識・技術力を有する看護師育成の重大な使命を担っていただきますとともに、地域の看護力の向上に引き続き一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、公益社団法人砺波医師会砺波准看護学院の今後ますますのご発展をお祈り申し上げましてお祝いの言葉といたします。

砺波准看護学院
創立50周年を祝して

市立砺波総合病院
院長　伊　東　正太郎

砺波准看護学院におかれましては創立50周年を迎えられ本当におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

砺波准看護学院は、昭和39年に開設準備を始められ、翌年の昭和40年4月に第1回入学式を挙行されました。昭和39年といえば、この年の10月には、夢の超特急「東海道新幹線」が開業し、その直後には東京オリンピックがアジア初のスポーツの祭典として大々的に開催されました。この頃の日本は高度経済成長期のまっただ中にあり、昭和43年には国民総生産（GNP）が、当時の西ドイツを抜いて世界第2位に躍り出ました。また、テレビ・洗濯機・冷蔵庫の3種類の家電製品は「三種の神器」と呼ばれ、急速に家庭に普及していきました。これら便利な家電製品の普及は生活時間の配分にも大きな影響を与え、女性の社会進出を少しずつ促すことになったと言われています。

さて、准看護師制度を歴史的に振り返って見ますと、昭和25年当時の高校進学率が35％程度だったにもかかわらず、看護師国家試験を受けるには高卒以上が条件となっていました。これでは看護師不足が懸念されると医療現場では危機感をつのらせました。そこで、昭和26年に「中学卒業＋2年の看護教育を受けた者」を「准看護師」として医療に携われるようにしたのが准看護師制度の始まりです。その後、高学歴化が進み、現在の高校進学率は男女併せて97％を超えています。その観点からいえば准看護師制度の当初の目的は達成されたのかもしれません。しかし、近年の准看護師課程入学者の割合を見ますと、短大・大学卒業者の割合が増えており、准看護師制度が社会人からの再出発の受け皿として新たな役割を担っていることがうかがえます。一昔前のように、中学校卒業後にストレートで入学する人よりも、最近は、子育てが一段落し就労を希望する中高年や、医療現場での再就職を希望する社会人経験者が多いのが特色です。

准看護師制度が新たな役割を担うようになってきている一方で、准看護師養成所は年々閉鎖に追い込まれています。校舎の耐震化が必要となっても建て替える体力がないのが大きな理由のようです。その点、砺波准看護学院では、平成3年に学院校舎を新たに建設され、建物の老朽化という問題をいち早く解決されています。これは、学院運営に当たられた方々が時代の流れを先読みし、重点課題に取り組んでこられた賜と感服する次第です。その後も、スタッフの皆さま方が学院の理念を大切にし、学院発展のために尽くしてこられたご尽力に敬服するばかりです。また、それに応え、砺波准看護学院を学舎とし、勉学に勤しみ、社会に巣立っていかれた卒業生の皆さま方の奮闘に敬意を表します。学院の創立者、意思を引き継がれたスタッフの方々の取り組み、それに応え学ばれた学生の皆さま方、バックアップされた地域社会の支え、これらが一体となって、今日の50周年を迎えられたものとお慶び申し上げます。

国の試算によれば、団塊世代が後期高齢者となる2025年、看護職は200万人必要とされています。今後10年で、現在よりもさらに50万人増員しなければならない計算です。この看護師不足の時代にあって学院の存在意義は計り知れないくらい大きなものがあります。今後も建学の精神が連綿と受け継がれていくことを確信しております。また、砺波准看護学院がこの50周年を契機にして、更に大きく飛躍されんことをご祈念申しあげます。

砺波准看護学院
50周年を祝して

公益社団法人砺波医師会
砺波准看護学院
学院長　北　野　喜　行

砺波准看護学院50周年おめでとうございます。

節目の50年までの長き日々、発生する多くの困難な問題を克服し学院を支え続けてこられた関係各位の御苦労を偲び衷心よりお祝いを申し上げます。

日本の准看護師制度は1952年（昭和27年）女性の高校進学率がまだ低かった時代に看護職員を増員する目的で創設されました。過去の敗戦からようやく復興の兆しが見え医療に国民の関心が注がれ出した時代です。

当学院の源流を遡れば、富山県では1953年（昭和28年）複数の病院に付属して准看護学校が開校しています。砺波厚生病院もその一病院であり、昭和28年3月30日付属准看護婦養成所の指定を受けています。この准看護婦養成所はその後1965年（昭和40年）3月31日に砺波医師会に移管され富山県医師会付属砺波准看護学院として4月2日に第1回生29名の入学式を挙行しました。以来50年間絶えることなく931人の卒業生を輩出し、砺波医療圏を支える看護に絶大な貢献をして来た事は当学院の大きな誇りであります。

歴代の学院長専任教官をはじめ、多忙な診療看護検査の合間を縫い専門非専門を問わず学生に講義をして下さった教師でなき医療教育陣の努力に深い感謝を申し上げる次第です。

復興の時代日本の女子高校進学率は飛躍的に増大し、看護師養成所の入学者が大きく増え看護師数が急増しました。准看護師養成機関と看護師養成機関の数的変化を見ますと、戦後多数を占めた准看護師養成機関は1975年（昭和50年）を境に逆転し、看護師養成機関の増加とは逆に著しく減少してきました。富山県では最盛期に18校あった准看護学校は次第に閉校し現在は2校のみであります。

当学院の応募者数を開校から調べますと1995、1996年（平成7、8年）は入学競争率が1.0倍と過去最低となっています。しかし入学希望者はその後再び徐々に増加し2004年（平成16年）には2.8倍の入学競争率となりました。時代の背景として社会の景気低迷に加え、20代後半から30代前半の女性の労働市場の低迷が准看護師免許の魅力を高める一方、男子の看護職への関心の亢進が准看護学院入学希望者増加の理由ではないでしょうか。

当学院は今社会人の学び直しの場として脚光を浴びています。

診療報酬点数改定の度に診療報酬誘導として病院の施設基準に占める看護師比率が高くなってきました。国公立病院の看護職に占める准看護師の比率は極めて低くなりまたが、現在キャリアアップを目指す准看護師に看護師資格への道を拡大支援する厚生労働省の動きがあります。

超高齢化時代の到来する明日、医療関係者の不足する地域医療介護施設に准看護師の人間性豊かな看護の貢献が期待されています。

最後に准看護学校の実習施設の確保が困難との情報も漏れ聞こえる中、市立砺波総合病院が快く実習病院を引き受けて下さる事に多大な感謝を申し上げます。2013年（平成25年）4月設置主体が公益社団法人砺波医師会となりました。非砺波医師会員が砺波医師会長の懇願とはいえこの伝統ある砺波准看護学院学院長を何の深い考えも無く引き受けこの慶事にめぐり逢えた幸せを感謝いたします。

創立50周年のお祝いの言葉

公益社団法人砺波医師会
会長　金　井　正　信

砺波医師会に砺波准看護学院が設立されて50年を迎えることができました。様々な困難の中でその経営と運営に携われた諸先輩をはじめ、スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

砺波准看護学院の卒業生は、進学してもその半数が地域の医療機関に就労しながらの進学で、卒業生の7割以上が地域の医療施設に就業し地域の医療を支えてきました。

近年の地域医療現場における看護職員の不足は深刻で、中小病院や有床診療所、無床診療所はもとより、老人ホームやデイサービス施設などをはじめ様々な介護施設では、看護職員の確保はその施設の存続をも左右する切実な問題となっております。このような状況の中で、1年にわずか20人ずつではありますが地域に准看護師を送り出し続けることができることは、砺波医師会といたしましても、地域医療にささやかに貢献できているものと考えております。

また、砺波准看護学院は、社会人などが看護職員を目指すための数少ない教育機関であります。近年の厳しい経済状況の中でも、働きながら准看護師の資格の取得することができる砺波准看護学院の役割には非常に大きなものがあります。実際、教壇に立っていても、一度社会に出てから看護の道を選びなおしたみなさんの目には強い決意と高い理想を感じることがあり、良い看護職員になると直感することがしばしばです。

砺波准看護学院では、教員のなり手がなく確保が難しいことや、実習施設の安定的な確保が難しいといった問題があります。また准看護師制度そのものの存続を問題視する人たちもあります。さらに、砺波医師会の厳しい財政事情から学校経営も容易とはいえない部分もあります。しかしながら、砺波医師会のささやかな社会貢献として今後も学生のみなさんの希望に沿えるよう砺波医師会としても全力で努力してまいります。

最後に、看護職員や、学校の評価は、高邁な理論の実践や、学歴によって左右されるものではありません。個々の看護職員が、いかにかかわりを持った患者さんの話を受け止め、いかに気持ちを和らげ安らかに医療を受けてもらえたかによって評価されます。准看護師制度自身が問われる昨今ではありますが、卒業生の皆さん、そしてこれから医療の現場に向かうみなさん、みなさんが学んだことの一番大切なことは患者さんに対する気持ちの持ち方です。どんな局面でも、自信を持って、胸を張って患者さんに接していただきたいと思います。

皆様の今後の検討を期待します。

歴代学院長

初代学院長　室　生　助　信

第二代学院長　住　田　　宏

第三代学院長　桐　沢　奨　二

第四代学院長　金　子　　豊

第五代学院長　沼　田　仁　義

第六代学院長　河　合　康　守

第七代学院長　津　田　達　雄

第八代(現)学院長　北　野　喜　行

「愛語回天」

“優しい言葉をかけてあげなさい。それだけで弱っている病人を元気にしてあげる力がありますよ”

「向いて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を楽しくす。向かわずして愛語を聞くは、肝に銘ず。知るべし愛語は愛心よりおこる。愛心は慈心よりおこる。愛心は慈心を種子とせり。愛語よく回天の力あることを学すべきなり。」（永平寺開祖　道元禅師著　正法眼蔵　菩薩　四摂法の中の言葉）

道元は言う「愛語というのは、衆生を見るに、まず慈愛の心を起こし、顧愛の言葉を施すのだ。面と向かって愛語を聞くと、顔を喜ばせ、心を楽しくする。面と向かわないで、愛語を聞けば肝に銘ずる強い感動を受ける。愛語というのは愛の心から起こる。愛の心は慈悲の心を種として起こる。愛語には衰えた勢いをもりかえし、弱りきっている病人をもとどうりに元気にする力があることを知るべきである。」

また言う、「世俗には相手の安否を問う礼儀があるが、仏道にも珍重とか不審という言葉がある。朝起きて、お早うございますという挨拶、それがすでに朝の仏法である。赤子を愛するような衆生への慈念、そんな思いをこめて言葉をかけるのが愛語である。」と

良寛は「正法眼蔵」の中でも、とりわけこの「愛語」の章を重んじて、あの見事な筆跡でこの道元の文章を筆写している。

良寛という人は玉のような人格であった。良寛が二晩も泊まっていると、その家の中に自然と和気が満ち溢れ、彼が帰った後も皆が睦まじくなりけっして争うようなことはなかったという。

看護の看という字は手と目を書く。優しい手と優しい目、そして優しい言葉。これこそ看護の第一歩であることを心に刻みつけよう。

元学院長　**河　合　康　守**

砺波准看護学院の足跡

昭和40年に富山県医師会付属砺波准看護学院として開設以来、昭和54年に砺波准看護学院、平成19年に社団法人砺波医師会砺波准看護学院、平成25年に公益社団法人砺波医師会砺波准看護学院と名称を変更してきた。

年　月	学院に関する出来事	法の改正
昭和40年	各種学校申請許可書、認可される　名称　富山県医師会付属砺波准看護学院	
	第1回入学試験施行　受験者40名	
	第1回入学式を砺波商工会議所ホールで挙行し29名が入学する	
	第1回戴帽式を砺波商工会議所ホールにて挙行される	
昭和42年	富山県准看護婦資格試験（学科）が県立富山女子高校で行われる	
昭和42年	県立中央病院付属高等看護学院で実施試験が行われる	
昭和42年	県准看護婦資格試験合格者の発表があり、受験者27名全員合格する	カリキュラム改正
	第1回卒業式を砺波市役所ホールにて挙行される　卒業生27名	
昭和49年	学院創立10周年記念式典及び学院文化祭を開催する	
昭和54年	砺波准看護学院と名称変更になる	
平成元年		カリキュラム改正
平成3年	新学院敷地で起工式・落成式を行う	
平成4年	新学院校舎で始業式を行う	
平成14年	新カリキュラムとなり、教員3名になる	カリキュラム改正
	校舎の各室の用途及び面積の変更計画書を提出する	
平成17年	設置主体の変更	
	（旧）砺波医師会・西砺波郡市医師会	
	（新）砺波医師会・小矢部市医師会	
	福岡町が高岡市に合併し、小矢部市単独で小矢部市医師会に改称となる	
平成19年	設置主体の変更	
	（旧）砺波医師会・小矢部市医師会	
	（新）社団法人砺波医師会	
	県医務課の指導を受けて設置主体の変更となるが、運営は、砺波医師会・小矢部市医師会が行う	
	砺波准看護学院の改修工事	
平成23年	設置主体・運営の変更	
	社団法人砺波医師会の単独となる	
平成25年	設置主体の変更	
	（旧）社団法人砺波医師会	
	（新）公益社団法人砺波医師会	

目　　次

お祝いのことば ……… 砺波市長　夏　野　　修
お祝いのことば …… 市立砺波総合病院長　伊　東　正太郎
発刊のことば …… 公益社団法人砺波医師会 砺波准看護学院 学院長　北　野　喜　行
創立50周年にあたって …… 公益社団法人砺波医師会 会長　金　井　正　信
歴代学院長 …… 8
愛語回天について …… 10
砺波准看護学院の足跡 …… 11
寄　　稿　50周年によせて
　元学院長（6代） …… 河　合　康　守　13
　前学院長（7代） …… 津　田　達　雄　14
　学院担当理事 …… 藤　井　正　則　15
　講　　師 …… 16
　前 教 員 …… 21
　卒 業 生 …… 22
　現 教 員 …… 32
卒業生事例のテーマ・戴帽式の集合写真 …… 34
青春の思い出（写真集） …… 54

資　　料
　教育理念・組織図 …… 60
　職員の動向 …… 61
　カリキュラム変遷 …… 62
　講師名簿一覧 …… 64
　入学生・卒業生数の推移 …… 67
　編集後記 …… 68

愛語回天の由来について

元学院長

河　合　康　守

准看護学院創立50周年を迎えられた事に、心からお祝い申し上げます。

少し古い昔話を致したいと思います。

私が金沢大学医学部を昭和34年3月に卒業しまして、砺波厚生病院に、インターン生として来ました。当時、病院には付属の准看護学院がありまして、学院に講師として生徒さんに講義をいたしました。(何の講義をしたのかは忘れました)

昭和39年に医師会付属准看護学院を設立することが決まり、翌40年に、富山県医師会付属砺波准看護学院として認可されました。昭和40年4月2日第1回入学式が、砺波商工会議所で挙行されたと記録されております。

私は昭和40年5月に砺波厚生病院に耳鼻咽喉科医師として赴任いたしました。42年から学院の耳鼻咽喉科の講師になりました。以来途中3年間は抜けましたが続けて講師を平成19年まで勤めました。

その間、平成3年6月より新校舎建設の担当者としてその任にあたり、新しい校舎が現在の場所に翌4年1月に落成いたしました。

当時、新校舎の正面を飾る物を検討しておりましたが、記念となるモニュメントを検討しておりました。当時の学院長の提案で、名取川雅司さんの「ある日」と当時の市長、岡部昇栄様の「愛語回天」の揮毫となりました。

「愛語回天」の言葉は、学院長　桐沢先生からの提案でした。

永平寺開祖の道元禅師の著書「正法眼蔵」によりますと、

“優しい言葉をかけてあげなさい。それだけで弱っている病人を元気にしてあげる力がありますよ”という、看護師にとって大切な心を表す言葉です。

創立50周年を迎えるにあたって、生徒の皆さんは今一度入口にはめ込まれている、言葉の心を深く胸にしまってください。

学院の追憶

前学院長
津　田　達　雄

砺波准看護学院は昭和40年市立病院の一角に呱々の声を上げました。古いアルバム、卒業記念写真、寄せ書きなど思い出の品々を眺めながら筆を走らせました。学院は50年の歴史を重ね、約1000人の卒業生を世に送り出しました。まず「砺波准看護学院50周年おめでとうございます」心よりお祝い申し上げます。

私はクリニック開業（昭和49年11月）後、間もなく講師として学院との連がりをもつことが出来ました。あっという間に過ぎたように思う40年の歳月の長さを改めて、しみじみ思い知らされました。当クリニックに勤めていたTさん今年4月めでたく定年退職されました。彼女は中卒後、本学院に入学、学院卒業、検定にパスされ、以後40年間クリニックに勤務されました。学院の歴史と共に忘れがたい人生の出会いに感謝しております。

昭和40年市立病院、旧結核病棟を改造した教室で、生徒数も少なく、和気藹々の講義風景でした。教材も乏しくクリニックより借用しました。ある年度は入学者も少なく学院存続も危ぶまれ、先生方の奥様に協力して頂き「先生と生徒」ではなく、奥様方の勉強会の風景でした。しかしその後は、入学希望者も増え、入学試験も狭き門となり今日まで続いております。受験者の中には大学卒、高齢者も混ざり、教室内の空気もピンと張りつめたものとなりました。更に某参議員が「准看護師制度廃止」を国会でとり上げました。実働50万人、毎年1万人の卒業生を医療の第一線現場に送り出してきた准看護師制度の廃止は大きな社会問題となり、カリキュラム改革などにより生き残ることが出来ました。

この准看護師制度の歴史について述べます。昭和23年(1948)に制定された「保健婦助産婦看護婦法」は今日まで（2015年2月）26回の改正が行われた。内容的に最も大きな改正は、准看護婦を誕生させることになった1951年（昭和26年）の第2回目の改正であります。乙種看護婦は中卒者を入学資格とし、2年以上の教育をうけ、更に都道府県試験に合格しなければならないとされていたが、これも従来よりレベルの高いものであった。昭和26年（1951）甲種乙種の区別を廃止して、看護婦を一本に統一し「看護婦を助けて看護の総力を構成する要員」として新しく准看護婦の制度を設けることを主目的とした法改正が行われた。この看護婦と准看護婦の2本立てによる制度が現在まで続いています。昭和43年（1968）男子の准看護人の名称を准看護士と改正し、平成13年（2001）法律改正において、准看護師とし、法律の題名も改めました。以上が准看護師制度誕生の大要であります。

卒業生の皆さん、今後自信と誇りをもち、元気に活躍され、来たる超高齢化社会を支える大きな柱として頑張って下さい。

御活躍をお祈りします。

創立50周年によせて

学院担当理事
藤　井　正　則

砺波准看護学院創立50周年誠におめでとうございます。
昭和40年の開院以来、地域医療に貢献する准看護師を育成することを目標に日々その実践に努め、これまでに約1000名の数多くの卒業生を、その担い手として送り出すことができました。心よりお祝い申し上げます。

私が講師をすることになったいきさつは、まだ砺波医師会入会まもない頃のことでした。杏和会の席上で故矢島治先生より来期からの講義を引き継いでくれないかと言われたためです。一番下座に居た私は大先輩からのお話をお断りする理由もなく、また「自分の勉強にもなるから」の先生の一言もあり、二つ返事でお引き受けしました。

担当する科目は感染症（微生物学）です。大学での整形外科医局員時代には、結核性や化膿性の脊椎炎、関節炎さらには外傷に伴う四肢感染症等、整形外科と言えども多少なり感染症には関わってきたつもりでしたが、学院の先生から事前に渡された教科書を見て愕然となったことを昨日のように覚えています。学院で講義に使用する教科書「疾病のなりたち　感染と予防」の序章では看護師の使命を述べています。それは感染の危険性のある医療施設内であってでも、自分自身を感染から守り、そして感染の媒体者となってはならないという自己への戒めです。このことを一番強調し、いつも講義に臨んでいます。手探り状態が続きましたが、何とか慣れてきたのも束の間、今度は毎年のように新興感染症や再興感染症が増え、教科書改訂の度に厚くなっていくのでした。気がつけば足掛け15年間、感染症(微生物学)を担当しています。

本格的な少子高齢化社会を迎える中、地域医療の果たす役割が一段と高まってきています。その中において我々医師会会員と共に働く准看護師は地域住民の生命と健康を守る上で掛け替えのない重要な役割を担っています。一方で、レーザー治療、内視鏡治療、CT、MRI等の医療テクノロジーが研究開発され、大学病院、基幹病院から我々一般開業医でも比較的安全に取り扱える時代となりました。そして医療に携わる者として、高度な技術を身に付ける必要性が求められているのも事実です。どのように医療環境が変化しようとも、常に本校の教訓である博愛の精神「愛語回天」に立ち返り対応することで地域社会の医療に貢献できるものと確信しています。

全国に290余ある准看護師養成所の中でも、全国模試上位トップ10に名を連ね、そして資格試験でも常に100%合格を誇る当学院は、熱意ある専任教員や講師陣の指導の賜物です。それにもまして働きながら、そして家庭を持ちながらの厳しさに堪え日々努力する学院生の飽く無き向学心と自己目標に向けた弛まぬ勉学の積み重ねがあったからこそだと私は思います。

卒業された皆さんが、県内各地において輝かしい活躍をされておりますことは、講師の一人として大きな誇りであると共に、学院の限りない飛躍と発展を心からお祈り申し上げまして、お祝いの言葉にさせていただきます。

看護学院への携わり

寿康堂吉田医院
講師
吉　田　康二郎

砺波准看護学院創立50周年おめでとう御座います。創立に携わられた方々、運営・維持に尽力された方々、また学生を送り込んで頂いた砺波医療圏に敬意と御祝辞を申し上げます。

私が看護教育に携わる事になったのは昭和52年に富山市民病院へ奉職してから2年後からだと思います。当時の院長石田礼二先生から富山市立看護専門学校への講義の命令でした。内分泌代謝・糖尿病・食事療法（これは途中で外されました）がメインでした。当初は新しい知見を加えて張り切って講義していました。

しかし学生さん達は資格試験が目的であると言われてからは次第に教科書に準じた講義内容に変わり、辞職するまで約20年間続きました。逆に病院内の看護婦さんへの教育が厳しくなったと思います。試験問題は資格試験への対策が多かったと思いますが、基本的にはフィードバック機構・受容体・標的細胞ないし標的臓器、各論では代表的な疾患の問題でした。6～7年ぐらいは赤点の人もいましたがその後はいなくなりました。私の試験問題が振り落としではなく、またサボった訳でもなく、資格試験前のまとめであれば良いと思い、例年大きく変わった問題は出しませんでした。現在もその考え方は変わっていません。

砺波准看護学院とは平成16年に砺波へ戻ってきて、平成18年度から高田先生の後をと命じられました。講義内容は「身体のしくみ」の神経系・感覚器・血液・免疫・循環器系でした。解剖学です。永らく解剖学に眼を向けることなく過ごしてきましたので、解剖学実習（東京オリンピック時）以来であり新鮮な気持ちで有難く努めさせて頂きました。加齢のせいも大きいと思いますが、10年も経ちますと前記しましたような考え方で過ごしてきましたが、独りよがりになり現状に合わなくなってきているのではと危惧しています。学院長の先生・医師会の先生方・学院の先生方が少し怪しいなと思われましたら、忌憚なくおっしゃって頂けたらと思います。

最後に、入学されて翌日から日常生活からはかけ離れた用語の羅列に耐えて応えておられる学生さん達に敬意を表します。私は医学部ということで、ある程度の心構えはあったと思うのですが、ただ覚えるだけの講義は大変苦痛ではなかったかと思います。その後資格を習得されその役目を果たされているのは素晴らしいことと思います。この伝統が、この仕組みが続いていくことを期待しております。

「皮膚科の講師をしていた頃」

仲村皮膚科医院
講師
仲　村　洋　一

私は当時、砺波総合病院におられた井上先生が都合で降板され、1999年の中途より2012年まで皮膚科の講義を担当していました。始め市販の教材用のスライドをみせてもらったところ、あまりにも色褪せて、使いものにならないし、自分の持ち合わせの臨床スライドでも全く不足で、どうしようかと考え、手持ちの皮膚科学のアトラス（図譜）数冊のきれいな典型的カラー写真を複写しようとして、500Wのフラッドランプ2個をポールにつけ、左右に置き、一眼レフカメラで、夜な夜な手術台に腰かけとりました。又、図表などもいいなと思うものを心掛けてとり貯めておき、拡大鏡でピンぼけはないかと点検しました。毎年いい物と取り換えるようにもしました。

教科書はあまりに不完全で間違いもかなりあり、著者の力の入れようが感ぜず、梅毒やハンセン病等はほぼ触れていないので、副読本なみに毎回プリントを渡しました。これで高看どころか、怠けている医学生以上の知識は得られたと思います。しかし、時間は限られているので、つめ込み過ぎて、学生にとっては負担はオーバーであったと思います。

それでも試験をするとかなり好成績の方が多く、満足していましたが、何人かはやる気はなく、スライド燈影で暗くなる前より、昼食後で眠気のあるのも手伝い、机の上に腕をのせ惰眠をむさぼっておられました。しかし資格試験はほとんどの方が合格しておられたのは不思議です。

時代はスライド投影はすたれ、故障しても部品はなくなっていき、北野学院長にお願いし、砺波総合病院の先生に代わっていただくこととしました。私にとっては、これを機会に改めて、時代に即した知識、内容を盛り込もうと勉強し、有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝しています。

「栄養」の講義を通しての雑感

山本内科医院
講師
山 本 郁 夫

砺波准看護学院の「栄養」の分野の講義を依頼され20年ほどになります。地元地域医療に協力の一端として引き続き行っています。

当初、講義を始めるにあたって戸惑うこともありました。内容とすれば、どんな栄養素があって、その特徴やそれらが欠乏するとどんな病態を呈するか、ということを説明する、というふうに簡単に思っていました。渡された使用教科書をみて、これはちょっと大変と感じました。栄養素の消化・吸収、体内での代謝の記述はかなり高度。例えば、小腸での栄養素の吸収で「膜消化」とか細胞レベルでの「Na-グルコースポンプ」とか、当時恥ずかしながらよく知らなかった事柄も記載されています。「栄養」の理解には生理学生化学、解剖学などの基礎医学の知識と臨床医学の知識がある程度無いと理解が深まらないと思うのですが。さらに講義は一年次の2学期のはじめからなので、字句・文言の説明では分かってくれるかな、昼食後の良い睡眠提供になるのではという懸念があります。

学生もずいぶん変わりました。社会情勢、医療を取り巻く状況も変動し、看護学校の制度がかわり、応募学生も、転職、現職からのスキルアップ、人生自体からのトラバーユなど、事情・経歴は様々な社会人。以前のような新高卒は少数で年齢も高くなっています。年度の講義前に学院の先生から「今年は50歳以上は何人、男子は何人です。」と教えられます。

「栄養」の講義を年々進めていくうちに、あらためて思うことは、当たり前のことだが、「栄養」は食べることであり、そのための努力・工夫だということです。そう言えば、教科書の単元の名称も、「栄養」から「食生活」になっています。食べることは生きることでなおかつ、健康を維持し、病的状態を防ぐ、さらに回復させることを考えるのが「栄養」と思われます。かつての「栄養」の問題はその欠乏が主であったが、現在では、飽食が故の過剰、偏食。さらには拒食・過食症。食アレルギー。「食」と「食生活」これらを取り巻く社会環境も考慮も要する時代になったことです。そうすると「栄養」の知識は日常実際の食生活を通すと考察し易い。幸い（？）学生さん達は多く社会人であり、家庭を持っている人も多く、従って食事については現実対応経験有しているので、「食生活」の理解は速やかではないかと思っています。子供さんが腹をこわしたらどう食べさせるか、ご家庭で大切な人の健康の心配を食でどうするか、など余談とも雑談ともつかぬ具体的な話で彼らは少しは眠らず聞いてくれてわかってもらえるようにしているつもりです。試験には毎回、4分の1．の配点で「食・食生活」について論述問題を出しています。健全な食と食生活を理解し、病的弱者の食・食生活を考えてもらいたいと思っています。

「砺波准看護学院への思い」

やました医院
講師
山 下 良 平

砺波准看護学院の創立50周年、心よりお慶び申し上げます。

私が砺波准看護学院に本格的にかかわるようになったのは、開業して2年目の平成18年からであります。この年の2学期から一年生向けに毎週月曜日の午後、成人看護の消化器疾患、血液疾患、内分泌代謝疾患の授業を担当して来ました。2学期の間、約8回の授業を行なった後、学期末にまとめの試験を行なっています。

しかし残念ながら、実のある講義ができるはずがありませんので、学生さんにとってはいい迷惑だと思います。実際、担当時間が午後の最初の時間割りに当たっていることもあり、学生さんの大半は眠気をこらえているのがやっとと言った状況です。それでも、とにかく担当分野を一通りこなさないといけないと考え、テキストに沿って授業を進めていますが、範囲が広く時間的制約もあるため、どうしても駆け足にならざるを得ず、結局は学生さんの自習に頼っているのが現状であります。授業では、しゃべってばかりいるとますます眠気を催すだろうと考え、時々板書を交えるのですが、自分でも判読できないような文字しか書けず、またつい漢字を忘れて手が止まったりと、かえって学生さんの意欲を削ぐような状態となっており、いつも申し訳ない気持ちでおります。

そのような中、数年前の冬に3学期の授業を担当されている先生の都合が悪くなったとのことで、一度、代講を頼まれたことがありました。急なことで準備する時間がなかったのですが、一応専門としている呼吸器疾患の分野であったことと、木曜午後の休診日であったため、引き受けることにしました。私が教室に入っていくと、学生の皆さんは代講であることを知らなかったようで、突然3ヶ月ぶりに現われた私を見て少しびっくりした表情ながらも、数名が拍手をして迎えてくれました。私はたいへん気恥ずかしい思いをしながら、代講に来た旨を伝え、そして2学期の時と同じように授業を始めました。

このちょっとしたエピソードは、単純な私にとっては十分にうれしく、また励みになるものでした。週1回とはいえ授業のある月曜日は、昼食を食べる時間のないことも少なくなく、授業が終わるや否や医院に取って返し、午後の診療開始時間を遅らせて待っていただいていた患者さんの診察に直ちに移行するという状態が約2ヵ月半続くことになるため、毎年2学期が始まると気持ちが重くなっていたのですが、学生の皆さんが准看護師を目指す上で如何ばかりかの足しになればと思い直し、その後も講師を引き受けている次第であります。

看護師養成の場が、看護大学や大学の看護学科に移行しつつある今日、准看護師の立場は次第に微妙なものとなって来ています。しかし、医療現場における准看護師に対するニーズは、未だ根強いものがあることも事実です。砺波准看護学院が、そのような社会的要請に対して今後も着実に応えて行けることを心から願っています。

精神科の講師を続けてきて

砺波サナトリウム福井病院
講師
福　井　靖　人

創立50周年、誠におめでとうございます。

これまでに900人以上の准看護師を養成され、それぞれが地域医療の担い手として活躍されていることになります。当院にも多くの卒業生に勤務していただいていて大きな戦力となっています。これもひとえに歴代の学院長先生から始まり現在の北野先生をはじめ、諸先生方のご尽力の賜物であると思われます。最近では、北野先生が様々な式で述べられる激励に感銘を受けておりますし、学生と身近に接しておられる飯波先生方のバランスのとれた指導に感心しております。

私は、松岡宗里先生から「10年続けましたから」とバトンを引き継ぎました。引き受けた以上はそのくらい続けるものと覚悟してやってきましたが、あっという間に倍近い月日が経ってしまいました。当初は、精神疾患について何とかわかりやすく教えられたらとの思いで始めました。今は、だれもが精神疾患に罹りうる時代ですし、身体疾患によって精神的な変調をきたすこともあります。人を看ることにおいて精神科看護はあらゆる看護の基本となるとの思いから、患者さんとの間の治療的に適切な距離の取り方や、患者さんとの信頼関係をどのようにして築いていくかを理解してもらうことに重点を置くようになってきたように思います。また、難解な専門用語や教科書だけでは想像しにくい病状を理解してもらえるようにと、なるべく事例を挙げて説明するようにしています。若かりし頃の失敗談（成長談）なども交えながら……。今年は某製薬メーカーから、てんかん発作をわかりやすく解説したDVD（登場人物の演技によるものです）を提供していただきましたので、てんかんがイメージしやすくなりより理解しやすくなるものと期待しています。こうして秘かに工夫している点や是非とも理解してほしい、あるいは感じ取ってもらえたらと思っていることが、答案用紙の感想欄に記載してあると、大変うれしく思いますしやりがいを感じます。さらに学生の皆さんが熱心であることや当院の職員が教え子となり卒業しても引き続き勤務してくれていることが、これまで続けてこられた大きな原動力になっています。

最後に、地域医療の育成に微力ながらお役にたてていることに誇りを持ち、次の人にバトンタッチできるまでもうひと踏ん張りして行きたいと思っています。

砺波准看護学院創立50年によせて

柳澤医院
講師
柳　澤　伸　嘉

砺波准看護学院創立50周年おめでとうございます。

私と砺波准看護学院との関わりはH15年に吉田武雄先生の後任として内科講義を受け持ったことから始まり今年で10年がたちました。50年の1/5とわずかな期間ですが同院にかかわることができ大変うれしく思います。開業前も大学、看護学院で講義の経験はありましたがいずれも専門の消化器領域であり、「膠原病、感染症、寄生虫」の講義は初めてでしたので急遽、教科書、資格試験問題集、内科書、内科学会雑誌で同領域を再度読み返し勉強したことは今でも懐かしい思い出です。改めてこれらを系統的に読んでみますと、この領域の医学の進歩は著しく知識の再確認はもとより最近の知識を得る良い機会となりました。もしこのような機会がなかったら日常の診療に追われ新しい知識を得る事がなかったかもしれません。准看護学院での講義は私自身にも生涯教育の必要性を認識させるよい機会になったと思っています。

さて先日世界中の平均寿命が発表されました。日本人男性の平均寿命はほぼ80歳、また女性は87歳で4年連続世界1の長寿となっております。一方少子化も広く知られ富山県とくに砺波地方の高齢化率も年々高くなっております。歳をとれば医療とかかわることが多くなり、また医療だけでなく看護さらに介護が必要となります。近年看護師不足が指摘されています。今後の高齢化を考えるにその傾向はさらに進むでしょう。このような状況の中、50年の長きにわたり看護従事者を送り続けた砺波准看護学院の実績は大変素晴らしいことであり、砺波さらに富山県においても多大なる貢献をされてきたと言えるでしょう。近年看護師不足解消を目的に看護大学、看護学部の増設が毎年のごとく認められ乱立の様相を呈しています。それに伴い指導する側の人員必要となります。看護師教育施設を新規に立ち上げるのではなく砺波准看護学院のような実績を持った学校を拡充し、公立で支援または運営するのも一策と思うのですが。

今後も砺波准看護学院が益々の発展を遂げられますよう御祈念申し上げます。

「砺波准看護学院の創立50周年を祝して」

医）にしの会　理事長
講師
西　野　一　晴

砺波准看護学院が創立50周年を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

砺波准看護学院が発足し、第1回入学式が挙行された昭和40年4月2日は金曜日でしたから、私は当時小学2年生で、4月3日土曜日の昼に、小学校から帰る途中で、「北一」にあるお豆腐屋さんから、「看護学校が近くにできたよ。」と巷の噂話として聞かされました。そのころといえば、テレビが普及間もないころで、東京オリンピックの金メダル選手や、東海道新幹線が東京大阪3時間で走った映像などが、持てはやされていた時代でした。一方すばらしいヒーロー・ヒロインの裏側には、高度経済成長の歪、社会闘争・交通事故・ベトナム戦争・各種成人病・公害汚染などが併発してきて、地域の健康福祉を守るにはどうすれば良いのかを論じられるメディア社会でもありました。

このような昭和世代の中で、父の跡継ぎとして、そして、地域の医看介福祉の担い手として、医学部への道を突き進み、育て上げられた私自身でもありました。

昭和51年の春は、ちょうど砺波准看護学院10周年記念誌の発刊されたころで、父親の記念誌用顔写真のカメラシャッターをおした記憶があり、無事、医学部にも合格させていただいた春でもありました。

そのころになりますと、当の故西野章悦といえば、熱心に往診医療のノウハウについて、手伝いがてらに、解説してくれたものでした。旧陸軍士官学校を経て、医学を志した経緯もあってか、4輪自動車の雪道走行や、山道の凹凸道路の走行技術を得意満面の笑みで語っておりました。特に、航空機エンジンと自動車エンジンの技術的相違点・共通点とか、ゼロ戦とB29型飛行機の機能相違点・問題点などを語らせると、新聞広告の裏面に図を描いて説明するほどの熱気でした。ただし、話題が、徐々に太平洋戦争の敗走した経緯になると、だんだんと表情が曇ってきて、最後には、「敗軍の将、兵を語らず。(中国の史記・准陰候より出展)」とだけ言い残して、仕事に出てしまう癖もありました。当時の私は、医学部学生でも基礎医学を做っているころでしたので、難しい人体解剖や英語・ラテン語・ドイツ語のテストに苦労して取り組んでおり、不思議な印象で出て行く背中を見送ったものです。

北陸新幹線開業や2020東京オリンピックのニュースが飛び交うようになっても、成人看護の教壇の上で、夜勤で眠そうな看護学生さんに、眠気覚ましにちょうどいいかもと思って、何かしらの航空技術・自動車技術についてふれることがあるのですが、ふと『敗軍の将』から聞いていたあのときの話題が、どうも成人看護の解説を滲ませていたのかと、今更ながら感慨することがあります。現代の成人病や生活習慣病への糸口が、どうも顔を曇らせるほどの、「皮肉な結末」だったことが、今になってようやく覗われます。

砺波准看護学院が創立50周年を迎えられた今日、関係各位におかれましては、大変なご苦労が積みあがっているとは存じますが、今後とものご発展祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

砺波准看護学院おめでとう！そして、ありがとう！

創立50周年・戦後70年

さかした医院
講師
坂　下　英　雄

砺波准看護学院の創立50周年を心からお喜び申し上げます。

今年は「戦後70年」。

今となれば、砺波准看護学院が創立されたのは、「戦後の混乱期」のようにも思えてきます。

50年前といえば、当時、私の伯父が、「高波の診療所」に勤務していたことがあり、夏休みになると、お泊りの準備をして、田んぼの真ん中にある診療所で走り回っていたことを思い出します。

50年も経てば、砺波地区の環境も、医療、看護の状況も随分と変わったことでしょう。

そんな中、「看護教育の向上を目指して、50年間」というのは、素晴らしいことです。

この先、10年、20年と、まだまだ変わっていくことと思います。

看護の世界も、随分と多様化してきています。どのような形で看護にたずさわって行くのか、難しい時代にもなりました。

そのような社会で、「自分の世代でならこそ」できることを、精一杯することが、社会貢献につながることでしょう。

医療、看護も「資格を持ってする仕事」です。

その仕事には必ず「責任」が付いて回ります。

その仕事に対しての、一番の報酬は、病める人の「感謝」「笑顔」なのかもしれません。

これまで、砺波准看護学院の設立、維持発展に貢献されてきた方々に、感謝するとともに、ますますのご発展をお祈り申し上げます。

更に、これまでの卒業生の方々、これから入学して、看護の道を進もうとされる方々のご活躍をお祈り申し上げます。

創立50周年に寄せて

桐沢医院　眼科
講師
山下　泉

私にとって「准看護学院」は子どものころから身近な存在でした。当時は准看護師の資格を得るために早くから親元を離れ、病院や診療所に住み込みで働き、午前の仕事が終わったら慌ただしく学校へ行き授業を受け、また職場に戻り後始末や掃除に追われる毎日を彼女たちは過ごしていました。

小さいころの私は彼女たちのそんな苦労は目に入らず、夜になれば遊んでもらいたいと彼女たちの部屋に毎日のように入りびたっていました。大切なプライベートタイムを邪魔するとんでもない子どもだったと思います。それでも、いやな顔せず遊んでいただいた事に今更ながら感謝申しあげます。

その後、父が縁あって学院長に就任し、学院歌の作詞を担うことになりました。毎日のように作詞に頭を悩ましていた父の姿や出来上がった校歌を初めて聴いて私が「何とかの校歌に似ている」などと冷やかしたことを懐かしく思い出します。やがて私自身も眼科医となり学院の眼科の授業を受け持つことになり、さらに県医師会の理事を務めたことから学院の行事に参加することも多くなりました、まさか父の作った「学院歌」をこんなに何回も歌うことになるとは思いもしませんでした、歌い慣れればいい歌です。そうやって学院との関わりが多くなるにつけ、また学生さん達と交流が深まるにつけ、感じることは学生達の仲の良さです。それぞれ異なる事情を背負ったもの同士が年齢の差を越えて未知の世界で同じ目的に向う者同士の連帯感が特別強いのだろうと思います。

以前学生達の謝恩会に参加したときでした、それぞれの学生から学院で過ごした２年間に積み重ねられた努力や味わった感動や喜びの話を聞いたとき、この人達は目的を果たすためにこんな思いをしてここで学び、ここまでたどり着いたのか、そして、それを支える家族の力はこんなに強いのかと感動し思わず涙が出たことを覚えています。

こんな歴史を繰り返してたくさんの准看護師を送り出し、また、高等看護師への道筋を作ってきた准看護学院の功績は誠に大きく誇らしいと思います。これまで学院を支えてこられましたすべての皆様に心から感謝申しあげますと同時にこれからもこの歴史が繰り返され栄光の光となっていきますことをお祈り申しあげます。

「人」という字

講師
宮保洋子

先日、篠田桃紅さんの『103歳になってわかったこと』を読んだ。

日頃あまり自己啓発本は読まないのだけれど、副題“人生は一人でも面白い”に惹かれたのかも知れない。

「103歳の美術家 今何を思うのか」は著書を読んでいただくとして、ここにとりあげたのは、以下のような理由からだ。

御本の中で桃紅さんは、「漢字の『人』は、人は一人で生きられない、お互いに支え合って生きるものだから、二本支え合って成り立っている、と言います。しかし、古来の甲骨文字を見ますと、『人』という字は、一人で立っています。（中略）私には、古来の『人』の方が、本来の人の姿だと思います。」と、おっしゃっている。

私は学院で1990年から「精神保健」、2003年からは「患者の心理」の講義を受け持ってきているが、いずれも人間関係が大切なキーワードだ。いつの頃からか毎年一回は、「古来人は支え合って生きてきた。『人』という字が人と人が支え合ってできているように」と、自明のことのように話してきているので、「あれっ！」と思い、砺波図書館で白川静先生の「常用字解」を調べてみた。

「常用字解」は、甲骨文字や字体の起源が書いてあり、普段なにげなく使っている漢字の意外な意味を知ることができてとても面白い辞典だ。で、「人」という字を調べてみると、「象形。立っている人を横から見た形。」とある。字形の変化を見ると右を向いたり、左を向いたりしているが、「人」は支えあってはいない。一人で立っている。

いったい誰が「人と人が支え合う」姿だなんていったのでしょう。

日本は近代において目覚ましい経済発展を遂げてきた。しかし便利で合理的、経済的な生活を手に入れようと努力しているうちに、家族の「心と心が接する」時間が犠牲にされ、会社は効率重視の管理社会に変わった。そのためどんどん人間関係が希薄になってきたといわれる。そしてストレスを跳ね返して前へ進む強さが求められ、人に頼ることは悪いことであり、自立した人間であることの方が素晴らしいという考えが広がった。そこで、悩みを誰にも言えず、自分だけで抱え込んでいる人が多くなってしまった。

しかし、辛いときには一人で頑張らず、他人に甘えたり、頼ったり、相談したりすることは生きていくうえでとても大切だ。東北の大震災において「心のケアの必要性」が叫ばれたように、ストレスを受けた時に一人でじっと我慢するか、傍に相談できる人がいるかどうかがこころの健康にとって大きな違いをもたらすのだ。

一人で立っている「人」という字を、いつの間にか「人と人が支え合う」姿に見るようになってきたのは、孤独で寂しい現代人が、人と人のつながりを、もう一度心の通い合う、支えあう繋がりにしていきたいと願っていることの表れではないだろうか。

一方、桃紅さんは「古代の『人』のように、最後まで、一人で立っている人でありたいと願っています」ときっぱり言い切る。

私のように甘っちょろい人間はとても103歳まで生きられないと思った。

創立50周年にあたって

前教務主任
浅田睦子

創立50周年おめでとうございます。

伝統ある砺波准看護学院に長きにわたり勤務し、その一端を担わせて戴いたことを光栄に思い、感謝の気持ちで一杯です。

今から37年前、砺波総合病院構内にある学校を始めて訪ねて以来の、当時のことが懐かしく思い出されます。

第一に、周囲の方々の理解ある暖かい環境に恵まれたことが幸いでした。若輩で教務は初心者だった為、先輩から看護教育や学院の役割について丁寧に教わり、安心して頼り、その後は同僚と共に医師会職員の協力も得、努めてきました。

医師会の先生方は、学院運営は勿論、看護教育、生徒指導をこんなに大切に熱心に行っていらっしゃるとは、病院勤務している時には思いもよらないことでした。

故人となられた室生学院長はじめ歴代の学院長、理事の先生方には、何事も率直に相談しますと、必ず受けとめて返事を戴き支えられ続けることができました。

講師は、医師会員はじめ多人数で大変熱心でした。中でも砺波総合病院では、殆どの科、分野で担当され、病院立の学院から医師会立の学院になった経緯もあって“看護職を育てる”という気風や意気込みも見られ、実習病院としても最適でした。又、学院は建物が古いのでなにかと故障もあり、その都度病院の担当者が修理される等、内線で連絡できて都合もよく病院には大変お世話になっていました。

生徒は、年令、学歴等多様ですが、2年間の間に仲良く教え合い、相談し合い、まとまったクラスになって、休講時は自己学習にも励み資格試験は殆ど100%合格。“こんなに勉強し、こんなに楽しい学校は、始めてだった”と、卒業時の感想もあり、親子、姉妹、夫婦で卒業した人もありました。

平成3年、待望の学院が現在地に新築され、教材は全て新品で、ピアノ、そして学院歌もでき、明るく夢の様な学習環境になり学内実習にも大変力が入りました。

又、入学式、戴帽式、卒業式はすべて、開校以来初めて本校で挙行され、感激と喜びをかみしめ、学院祭も卒業生他、多数の来場者を迎えて楽しく開催。マスコミの報道もあり、入学応募者は格段に増え、男子生徒も多くなってカップルも誕生しました。

地域では多数の卒業生が活躍している中、退職して8年、時には声をかけて下さったり助けてもらうことも多く、大変心強く感謝しています。そして、今、“看護は今後共、ますます要求され、期待が高まっていくばかり”だと実感します。

看護教育の充実を切に願い、学院の更なる発展を心からお祈り申し上げます。

砺波准看護学院創立50周年を祝して

元専任教員
大橋孝子

砺波准看護学院創立50周年を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。

私は、当学院に勤務していたのは平成2年4月から平成17年3月の15年間だと思います。ちょうど学院が現在の幸町に移ってきた時と同時でした。全く看護教員の経験のない私でしたが、偶然看護学校の同級生だった浅田睦子さんに勧められて、勤めさせて頂くことになりました。暫くして、教務が主任の浅田さんと2人の時が10年近く続きました。

色んな事がありましたが、やはり思い出深いことは教務が2人だった時のことです。

その間に学院創立30周年記念を当時の学院長の河合康守先生のご指導のもと行ったこと。また、まだまだ教員としての経験が未熟な私は浅田さん（当時は浅田主任と呼んでいました）から本当に多くのことを教わりました。特に生徒に対しては時には厳しく、時には優しく、よく生徒の悩み事の相談にのってあげていました。また、浅田さんは先達者の方々から教え込まれたものを受け継いで実践されているのが良く解りました。そうしているうちに私も少しずつ教員として成長し、意見を交わしあえるようになり日々模索しながらやってきました。また生徒からも学ぶことが大変多かったと思います。

大半の生徒たちは、午前中はそれぞれの職場で仕事をしながら午後は学院で勉強する彼らは、資格を取るというはっきりとした目標があるので本当によく頑張って学んでいました。時には、先生方の講義の声が子守り歌となってこっくりと居眠りをすることもありましたが。

こんな嬉しい驚きもありました。それは、毎年2年生が受ける［全国准看模擬試験］に初めて成績順位が全国一位になったことです。その時は、理事の先生方と共に大いに喜びあいました。そして、生徒も教務も今までこつこつ積み重ねてやってきたことに自信がつき、人が見てない時や見えない所こそ手抜きをしないで患者さんのために行うことが、看護者の資質としてとても大切なことだと確信したものでした。

今後、准看護師制度がどのように変わって行くのかわかりませんが、これからも砺波准看護学院が、教務の皆様方、関係者の皆様によって益々ご健勝、ご活躍されることを心からお祈り申し上げます。

「創立50周年記念によせて」

31回生　谷　田　博　一

創立50周年おめでとうございます。私が卒業して18年が経ちました。学生生活を思い返すと、31回生は22人中9名が男性と男の割合が多く、個性豊かなメンバーが多くいたと思います。仕事をしながら勉強をして仕事と勉強の両立が大変だったことを思い出します。夜勤明けの授業は睡魔と闘い、職場の先輩に勤務時間を調整してもらったり、レポートなどを見てもらったりと助けてもらいました。実習がつらい時もありましたが、学院祭や遠足など楽しい思い出も多くありました。卒業後、進学する人、違う職種を選択した人、そのまま就職している人など、それぞれの道を歩んでいます。私は卒業してからは進学し、病院勤務をしていましたが、現在は老人介護保健施設で勤務をしています。学校で学んでいたころからみて、看護の役割が大きく変わってきていると思います。医療も進歩をしていき、学校で学んだことが今では違っていることもあります。病院では高い専門性も求められるようになってきて、より高度な技術、知識が必要になっています。社会のニーズも変わっていき、看護の活躍の場も在宅、福祉へと広がっていきました。時代に乗り遅れないように常に勉強していかなければならないと強く思います。ニーズが変わっていくなかでも、看護、介護が必要な方や、悩んでいる人々に向き合い、その人に寄り添い看護をしていくことは変わってはいないと思っています。これからも寄り添う気持ちを忘れず看護をしていきたいと思います。

「学生生活の思い出」

32回生　岸　木　淳　子

創立50周年おめでとうございます。

私は今から19年前に砺波准看護学院に入学しました。33才で下の子供が小学2年生でした。将来自立し、いくつになっても現役で働けるよう資格を持ちたいと思い入学しました。受験の日は待機室が図書室で、たくさんの人がいて不安な気持ちだったことを覚えています。

当時は勤務しながら学生生活を送るという決まりであったため、午前中は仕事をし、午後から学校へ行き、授業が終われば病院に戻りお風呂掃除や夕食の介助をし、一日があっという間でした。家に帰れば子供達の世話をしながら、夜勤もあり、妻、母、学生と3足のわらじをはく生活でしたが、患者さんから「大変やね、頑張られ。」と励まされ疲れがふきとんでいた気持ちは忘れられません。学校の授業はむずかしかったのですが、以前に医療事務をしていたので医療用語は少し理解できたことや、浅田先生や大橋先生が優しくて相談しやすいこともあってとても充実していました。

一年の時に行った戸隠への遠足、戴帽式、一、二年合同の学園祭、砺波総合病院への実習。現地集合で緊張の日々などいろいろ思い出されます。職場では試験が近くなると先生が私達学生に課外授業をして頂き、厳しいながらも恵まれた環境だったと思います。

近年、少子化、超高齢社会、犯罪の低年齢化、ネット犯罪、地震や火山の噴火、異常気象など不安な現実が多く毎日のようにニュースに流れてきます。看護、介護職不足、医療の進歩により中心静脈栄養や胃瘻増設により、寿命が延びています。政府の方針として在宅での看取りをすすめていますがマンパワーの不足や家族の協力が困難、認知症の増加等、問題が山積みしています。一日一日を感謝するとともに、人を思いやる気持ちを忘れず、これからも看護師の仕事を続けたいと思います。

「学生時代の学びと思い出」

33回生　**廣　瀬　有希子**

創立50周年、お慶び申し上げます。

今年に入って突然、母校からの封書が届き懐かしく思いました。見れば、創立50周年を迎えるというもの。50周年ということは…と、卒業してそんなにも年月が過ぎていたことに気づき、同時に学生だったあの頃を思い出しました。

あの頃は、高校卒業後直ぐに砺波准看護学院に入学し、同時に病院へ就職。社会人一年目の私は、今よりもとっても不器用で叱られるのが仕事でした。なので、職場や実習先でも、自分の考えたように事を運ぶことが出来ず、悔し涙を流したこともしばしばありました。

しかし、そんな私でも実習先の一人の患者様から、今でも忘れられない貴重な経験をすることが出来ました。その患者様は悪性腫瘍末期で、転移による下肢痛のために歩行困難となっている方でした。どう看護してよいかわからず、私は「もう治らないからいい。」と言われるその足を、少しでも良くなるようにとの思いを込めて、そっとなで続けるしかありませんでした。なのに、その患者様は涙ぐみながら「ありがとう。」と声をかけてくださったのです。私は、感謝の言葉をかけてくださったことに深く感動し、これからは患者様の心をいたわることのできる看護師になろう、と決意したのを覚えています。

このように感動した経験は実習先だけでなく、職場でもありましたが、書ききれないくらいです。今はもう出来ませんが、看護助手として働けたことも貴重な経験で、すべてが私の糧となっています。

こんな経験をさせていただけたのも、ひとえに医師会の先生方、学院の先生方、その他いろいろな形で携わっていただいた方々のおかげと感謝いたします。

今後、砺波准看護学院の益々の発展を祈り、結びの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

「出会い、縁」

34回生　**中　村　なぎさ**

「看護学校に行ってみんか。」

この一言がきっかけで、わたしは現在の職である看護師になった。

それまでの生活といえば、短大在学中からしていた駅の売店のアルバイトを、最終的には短大を卒業と同時に、全てを一任され、それなりに充実した日々を送っていました。毎日売店へ新聞を買いに来ていた知人の一言が私を看護師人生へと導いたのです。

看護師となり現在、十数年以上が経とうとしています。その中で特に考え、思わされることは“出会い、縁”の大切さであることです。

あの一言がなければ看護師になっていなかっただろうし、また砺波准看護学院との出会いもなかったと思います。看護師として働くようになり、いろいろな患者さんとの出会いもありました。患者さんから学ぶこと、一緒に働いているスタッフから学ぶこと、全てが“出会い、縁”と関わっていて、そして私を成長させてくれていると実感する日々です。

私の柄になく、とても真面目な文章となりましたが、とにかく“出会い、縁”のおかげで看護師となることができ、本当に心から良かったと思っています。

働きながら砺波准看護学院へ通い、共に勉強、実習を乗りこえた戦友の皆様、元気に過ごしていらっしゃいますか。あの頃の思い出は私の一生の宝物となっています。

あの頃の思い出と、出会い、縁を大切にしこれからも看護師人生を駆け抜けていきます。

最後になりましたが、創立50周年おめでとうございます。

砺波准看護学院との出会いに感謝し、今後の御活躍、御健闘を心より御祈りしています。

「砺波准看護学院での生活を振り返って」

35回生　横　山　　崇

私が砺波准看護学院に入学したのは、21歳の時でした。高校卒業後、一旦は一般企業に勤めてはいました。しかし諸般の事情で辞めることになり、就職活動をしていた頃に当時、松岡病院で師長をしていた近所の方が働きながら資格を取れる准看護学院のことを教えてもらい、松岡病院で看護助手をしながら、学院に通うことになりました。

入学当初は、ただ准看護師の資格が取れればそれで良いという考えでいました。しかし当時、松岡病院で働きながら進学課程の学校に通い看護師の資格を取るために勉強に励んでいた先輩の話を聞くうちに看護師の資格を取ることも悪くはないと考え始めました。

また、同期にも進学課程の道に進みたいと希望していた方が大勢いたことも考え方が変わっていった要因のひとつでした。

その後、県立総合衛生学院に進学し、無事に看護師の資格も取得し、砺波総合病院に就職でき現在に至っています。当時、講義でお世話になった方たちと一緒に働いている事が不思議な気もします。また、砺波准看護学院の学生が実習に来るのを見ると、実習中によくトイレでサボっていたこと(笑)や、怖いスタッフの噂話に花を咲かせたことなどがついこの間の事のように思い出されます。

砺波准看護学院で過した2年間は、自分にとって大きなターニングポイントになったことは間違いないと思いますし、考え方を変えさせてくれた人たちには感謝しています。

「看護との出合い」

36回生　安　田　ルリ子

誰かと出合う一つ一つの場面を大事にすること、感謝の気持ちを忘れずにし、その思いを相手に伝えること。私が砺波准看護学院での学生生活の中で学び、看護の場面だけでなく誰かと接する時にいつも大切にしていることです。看護の仕事に携わっていると、毎日とても多くの方と出合います。接する時間や期間にそれぞれ違いはありますが、どの場面でも自分にできるかぎりの看護と思いやりを持って接することを心がけています。

私がこのような思いを持てたのは二年間の学生生活で私自身がたくさんの方と出合い、その方々に助けられ励ましてもらえた思い出があるからです。学生だった当時の私は仕事にも慣れておらず、家庭でもまだ幼い子供の育児もあり、それに学業が加わったことで日々を過ごすだけで精いっぱいでした。そんな私が頑張ることができたのは、私を支えてくれた家族や力を貸してくれた職場の方々、温かく見守って下さった先生方、そして協力し合い励ましあった同級生のみんながいたからだと思っています。辛く苦しい時に支え受け止めてくれる人たちの存在の有難さや嬉しさを強く実感し、そんな人との出合いに感謝をしています。今も私は看護という仕事を続けています。医療の現場では厳しいことや苦しいこともありますが、その中で人と出合い触れ合うことに楽しさや喜びを見いだせているのは学生時代の経験があるからだと思います。

今回の文集を書くことにあたって当時の事を思い出し懐かしく思うとともに、支えて下さった方々へ感謝の気持ちも胸に広がってきました。これから看護の世界に入られる方々に、多くの出合いからたくさんの喜びや思い出が得られることを願っています。

「砺波准看誰学院創立50周年記念にあたって」

37回生　安　田　賢　治

このたび、砺波准看誰学院の創立50周年の記念すべき節目を迎えられましたことは誠におめでたく、心よりお祝い申し上げます。

昭和40年4月2日の第一回入学式挙行以来今日まで、県西部の医療を支えるために学院運営にご尽力された各先生、学院の発展に寄与されました諸先輩方に深く敬意を表す所でございます。

私自身、学院で学んだ2年間はとても実り多い期間でした。准看護師の教育課程の特徴上、同級生の年齢層の幅が広く、世代の違う同級生と机を

並べて学ぶことは同世代からは学びえない発見や体験がありました。今でもその貴重な発見や体験が私の看護に活かされています。

准看護師制度を取り巻く環境は変わっていくと思いますが、昨今、急速な高齢化は疾病構造の変化を通じて、必要とされる医療の内容に変化をもたらしてきています。主に青壮年期の患者を対象とした医療である、救命・延命、治癒、社会復帰を前提とした「病院完結型」医療から、老齢期の患者が中心となる医療へ、病気と共存しながらQOLの維持・向上を目指す、住み慣れた地域や自宅での生活のための医療、地域全体で支える「地域完結型」医療に変わってきています。

この「地域完結型」医療への転換と共に地域自治体や介護施設・在宅など、医療施設以外から看護職が求められるニーズが増加することが見込まれる中、元来地域自治体や医療施設以外を主活動としている准看護師の需要と重要性が今後、高まることが期待されます。

砺波准看護学院が50年間に渡り積み重ねてこられた歩みと実績を財産とし、県西部の医療を支える「准看護師養成所」として発展されますよう心から祈念申し上げます。

結びに、砺波准看護学院の今後ますますのご発展と、学院関係者、諸先輩並びにそのご家族の皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

「学院生活を振り返って」

38回生　**福　冨　里　子**

砺波准看護学院創立50周年おめでとうございます。

私は第38回生として学び、卒業して12年が経ちました。

私の在籍していた38回生は、10～40代の幅広い年齢層と、様々な経歴を持つ個性豊かなメンバーが揃い、特にそのまとまりのなさはいつも先生方からご指摘をうけていたように思います。私自身は、社会人経験を経て看護師を目指し、20代半ばに入学しました。入学当初は、看護独特の世界に戸惑い、抵抗を感じることもありました。しかし実習で看護の難しさとともに奥深さを実感し、甘い考えは一蹴されました。クラス内でも徐々にお互いの理解を深め、無事全員で卒業式を迎えられたこと、懐かしく思い出します。准看護学生時代があり、今の看護師の道につながっているのだと、改めて感じています。

今後、ますますの発展をお祈りします。

「看護職をめざして」

39回生　**辻　倉　美智子**

このたび、砺波准看護学院が創立50周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

「光陰矢の如し」と言いますが、月日の経つ事の何と早いことでしょうか。39回生ということで、私が入学を許していただいてから、早くも11年が経ちました。

入学時の年令は50才、我が子と同じ年頃の同級生と机を並べ、楽しくもある種、使命感のような意識で懸命に学生生活を送っていたことが思い出されます。

6才から22才まで「学校」というところで、その時その時精一杯学習に励んだつもりでした。しかしながら、准看護学院での2年間は若かりし日の「学習」とは、全く異なるものだった気がします。

自分自身に課した予習・復習はもちろんのこと、砺波総合病院や訪問看護での現場実習、現役の医

師の先生方による講義など、毎日が充実感に満たされていました。

仕事と家庭、そして学校という両立ならぬ三立でも全く苦にならず、それ程に「看護」は自分にとって魅力的分野だったのです。

現在は、定年後再雇用の身となり、福祉施設での機能訓練担当として、看護の知識を総動員し、高齢者のこころとからだのケアに取り組ませていただいています。

在学中にお世話になりました各関係の方々、特に3名の恩師の先生方に感謝の意を込めたいと思います。さらに砺波准看護学院が今後とも、地域住民の生命の尊厳を守る礎であり続け、益々繁栄されることを祈念いたします。

「砺波准看護学院の思い出」

40回生　**松　代　亮　司**

砺波准看護学院が50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

私が学院に入学したのは、今から11年前の4月でした。現在勤めている病院の前事務長の勧めで入試を受けたものの、自分なんかに人の命を預かる看護師という仕事が務まるのだろうかと不安でいっぱいだったのを、今でも鮮明に思い出します。しかし、いざ入学して授業が始まると、その魅力に引き込まれていきました。なかでも一番惹きつけられたのは、本物の医師や看護師の先生方が、病院での体験談を交えて語ってくれた医学や看護学の世界です。解剖学や生理学を基に、まるでパズルをはめ込むように病態を解説していき、さらにそれを根拠にした技術指導を行っていくのです。それは理系の自分にとって理想的な授業でした。

そして、もう一つの思い出が臨床実習。最初はガチガチに緊張しながらも患者さんに接していき、慣れない手つきでたくさんの心配をかけたことと思います。にもかかわらずみなさん実習の最終日には、「ありがとう」と笑顔で言ってくれました。このことは10年たった今でも忘れられません。学校で興味を引き出してもらい、実習で温かい心をもらい、自分が生涯をかける仕事はこれしかないと確信していきました。

学院を卒業して10年近く経ちました。日々の仕事から学ぶことは多く、生涯学習は続いています。人との別れなどのつらい経験もありました。しかし看護師を辞めたいと思ったことは一度もありません。そんな看護の道をめざす学生が今も学院の門をくぐっていることは、自分にとって一番の喜びになっています。

「学院生活を振り返って」

41回生　**塚　田　美由紀**

砺波准看護学院創立50周年おめでとうございます。

私が学院に入学したのは24歳の時でした。周りは自分と年の離れた10～40歳代の男女で、1学年20人という少人数。うまくやっていけるのかという不安がありました。しかし、同じ目標を持ち、互いに勉強やプライベートで関わるうちにその不安はすぐに無くなり、楽しい学院生活を送ることができました。

実習は辛く、泣いていた学生もおり、看護の世界は甘いものではないと痛感した事を今でも覚えています。実習中、唯一の楽しみが昼食の時間帯でした。ご飯を食べながら、色んな出来事を語り合い、励まし合うことで辛さを乗り越えられたのだと思います。女友達が大盛りカレーを食べながら、みんなを楽しませ元気付けてくれた事も良い思い出です。

母性看護学実習で助産師という仕事に憧れ、命の誕生だけでなく女性の一生に寄り添う専門職になりたいと思い、助産学校に進学、助産師になりました。現在、学生時代に学んだ実習先で助産師として働いています。准看護学生が実習に来るたびに、昔の自分の時を思い出し懐かしく感じています。

旅行などの行事もあり、勉強の事を少しだけ忘れ仲間と楽しい思い出を作る事が出来ました。学院で出会った仲間は今でも連絡を取り合い、楽しい事や悩みを共有できる大切な存在です。学院の先生方にはふざけていて怒られたこともありましたが、勉強だけでなく進路やプライベートでも親

身になって相談にのって下さりました。今の私が看護師・助産師として働く事ができるのは、支えて下さった学院の先生方や仲間のおかげであり、本当に感謝しています。

母校の、今後ますますのご発展をお祈りいたします。

「創立50周年おめでとうございます」

42回生　**澤　武　かつ江**

砺波准看護学院創立50周年おめでとうございます。私も卒業して8年が過ぎました。在学中は大変お世話になりありがとうございました。看護の技術、知識を学ぶ事はもちろんでしたが、看護を実践する上での人を思いやる優しさ、自分を律する厳しさも学ぶことが出来た2年間でした。現在でも、教科書プリント類を見て復習、再確認等をすることがあります。砺波准看護学院で配布されたもの全てが財産となっています。准看護師就業者数は平成21年頃より横ばい状態からやや減少していますが、民間の病院施設等ではまだまだ受容があります。

保助看法32条には医師、看護師の指示を受けて業務を行うことになっていますが、医療看護の現場では厳しい状況の中、判断しなければならない事もあります。看護専門職として、より患者の視点に立った質の高い看護を提供出来る能力を持ち、又、医療の担い手として自律した准看護師を今後はより求められると思います。砺波准看護学院の名に恥じない様、今後も看護職を継続していきます。

「学校の思い出」

43回生　**木　村　光　宏**

この度は、創立50周年おめでとうございます。入学した当初、私は既に結婚し、まだ上の子が1歳の時でした。大学を卒業してからも十年がたっていました。

受験勉強では、すっかりなまった頭と心に鞭を打ち勉強を続け、なんとか合格通知を頂きました。

合格してからも、お金の心配も多少ありました。仕事との両立はできるのか？また子供は小さく妻は決していい顔はしていませんでした。

私自身は、その時はまだ若く、職場の同僚にも砺波准看護学院に通う先輩（同世代の先輩や年下の先輩）もたくさん居られたので一つ頑張ってみようと、前向きに考え進学致しました。

はや卒業して、7年が経つかと思うと懐かしく色々な事が思い出されます。

子供がかかる地域の先生方が講師として、来られる事でより先生を身近に感じ、授業に集中できたものでした。

蝋燭をともした中での戴帽式で、ナイチンゲール誓詞を誓った事も。帽子の代わりにチーフを頂いた事も懐かしく思います。

歳の違う同級生がたくさんいたことも学校が楽しかった理由の一つだと思います。皆、私も含め様々な家庭の事情がありましたが、頑張っている友人達の姿を見て、自分も頑張れました。

私のように人生半ばにおいて看護師を目指せる学校があることは幸いでした。人生の選択肢が広がり意義がある事と思います。

このまま学校が末永く存続する事を心より願っております。私も今後、看護師を目指して頑張りたいと思っております。

「学院生活を振り返って」

44回生　**白　井　大　祐**

創立50周年おめでとうございます。

期待と不安を胸に入学し、とても充実した2年間でした。まず、1年生時にリーダーをさせても

らったこと。自分一人ではどうしようもなかったことがたくさんありました。でも先生方やクラスのみんなと協力し合いいろんなことを乗りこえられました。勉強の方でも大変なことがたくさんありました。分からないことばかりで嫌になる事もありました。そんな時でも周囲の刺激や協力があり乗りこえてきました。２年生時は、実習がほんとに大変でした。覚えることもたくさんあり、記録等もたくさんあり、更に仕事もあり、学校の授業もあり、ほんとに大変だったことが思い出されます。周囲の協力があったからこそ頑張ってこれたと思います。振り返れば大変だったこともありますが、毎日学校へ行くことはそんなに苦痛でもなかったです。仲間の存在はほんとに大きかったです。クラスのみんなにはほんと感謝です。大変だったこと以上にいっぱい笑顔で過ごせました。先生方にもたくさんご迷惑かけましたが、ご協力、ご指導ありがとうございました。

現在は、療養型病院で勤務しています。学校で学んだことを基本に先輩方の指導や現場でしか分からないこと、たくさん吸収することがあり毎日が勉強です。まだまだ分からないこと、知らないことがたくさんあります。少しでも多くのことを吸収し、少しでも誰かの為になればと思います。日々努力し、これからも看護の仕事を頑張りたいと思います。

「創立 50 周年記念に寄せて」

45 回生　**稲　葉　一　郎**

創立 50 周年おめでとうございます。卒業して早くも５年が経ちましたが記念誌発行の折り、懐かしい学生生活を思い出しました。思い起こせば、私の在籍していた 45 回生は個性的な面々であったと思います。皆がすでに色々な仕事を経験してきていて、その人なりのキャリアやプライドといったものを身に付けて入学してきています。年齢層も幅広く、入学するまで紆余曲折もあったであろう人もいると思われます。教える先生方も、さぞかし手を焼かれたのではないでしょうか。

私は特に強い意志があって准看護師を目指した訳ではありませんでした。なんとなく病院に就職し、最初は介護の仕事をして、勧められるまま流れで砺波准看護学院に入学しました。学業と仕事の両立は辛く、午前中仕事をしてからの午後の授業は眠気との戦いでした。

一番思い出に残っているのは、やはり実習です。個人的にも大変な時期であったのもあり、実習期間中は肉体的にも精神的にもほとんど休まることがありませんでした。看護過程の記録実習計画作成・実習計画に夜遅くまで悪戦苦闘の日々でした。集中力がなくなり、ミスをして先生に注意を受けたことも何度かあったと思います。このままでは、「学業と仕事の両立は無理」と何度も思いましたが、先生方の熱心な指導のおかげでなんとか実習を乗り切ることができました。

看護学生時代は色々ありましたが、無事に卒業できたこと、そして現在も准看護師として働いていられるのも看護学校の先生方、家族、仲間、職場の支えなどがあったからだと思います。看護学校で学んだことを思い返しながら、准看護師としてもっともっと成長していきたいと思います。

「人生のターニングポイント」

46 回生　**吉　田　與　博**

僕がこの仕事を選んだのはなぜだろう？過去を振り返った時に自分の人生に満足できるだろうか？そんな葛藤を日々繰り返したあとに、以前の

仕事を３年間で退職しました。

以前も医療職であったが、准看護師になろうと25歳の時に看護の道へ進みました。「自分にしかできないことが出来る人間になろう。」そんな熱い思いを胸に入学しました。

人生は遠回りしたほうがいいようになる！！

努力が楽しくなるような遠回りはありだ！！

そんな風に思いながら２年間を過ごしました。

平日の午前中は仕事で、午後は学校、休みは日曜日のみ。おにぎりを食べながら学校に通う生活も今振り返れば懐かしい限りです。同級生の中には学校の前後で夜勤をしたり、仕事に加えて育児をしている人もいて、僕より過酷な生活だったと思います。

授業中は寝てしまわないように、自主的に一番前の席、教壇の前にしてもらい、授業はなるべく寝ないように頑張っていました（笑）。新しいことを学ぶことは楽しかったです。実習も先生や同グループの仲間に励まされ、なんとかクリアできました。

卒業した翌月に僕は結婚し、今では妻と息子と楽しい日々を送っています。結婚式当日に46期生の皆さんから届いた人形は今でも大切に飾ってあります。素敵なクラスメートだったと今でも思います。

最後になりますが、46期生を代表し、砺波准看護学院の50周年を心よりお慶び申し上げます。

「学院時代で得たもの」

47回生　**長　澤　梨　佳**

砺波准看護学院創立50周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

さて、私が学院を卒業してまだ３年と日が浅いこともあり、学院で過ごした日々は鮮明に思い出されます。学院で過ごした２年間を振り返ると良い思い出ばかりです。勿論、実習は厳しく睡眠不足が続き子育てなどの家庭と学業の両立は厳しいものでした。しかし、振り返ってみると学院での２年間は一生懸命頑張った充実感があります。

なぜ、振り返ってそう思うのかを考えたところ、第一に先生方の人柄と温かい指導のおかげだと思います。先生方は分かりやすく丁寧に根気よく指導し見守って下さいました。実際に臨床にでてみますと、まだまだ経験や未熟さを感じますが、看護学院の先生方の存在は、不思議と今も私を支え見守って下さっているような安心を感じます。そのような先生方に恵まれたことに感謝しています。

また、第二に大切なものは、２年間一緒に勉強に励んだ友人の存在です。仕事・学業・家庭や子育ての両立がはかれたのも、友人の存在のおかげと感じます。実習・試験など苦しいこともありましたが、２年間一緒に同じことに取り組んだからこそ信頼でき、励ましあえたのだと感じます。男性の同級生は皆ムードメーカーで盛りあげてくれましたし、女性の同級生は頼りがいもある姉さんでした。振り返っても楽しくて信頼できる同級生でした。

そのような素晴らしい人に出会い、時間を過ごせた学院が50周年を迎えられ、ますます発展されますことを祈念しております。

「創立50周年を迎えるにあたって」

48回生　**上　田　達　也**

今年で砺波准看護学院が創立50周年を迎えるにあたり、今まで多くの方々が医療の道へと歩んで行かれたことだと思います。50年という長い歴史の中で学院でも数々の出来事があったことでしょう。私の学院生活でもいろいろなことがありまし

た。正直な話、私は勉強嫌いで途中、何度も辛いと感じることがありました。普通の学生生活とは違い仕事と学業を両立しながらの生活、やめたいと思ったこともありました。看護職という仕事に対しても理想と現実の違いからこの道を選んだことに不安や迷いを感じることもありました。しかし、そんな時に助けてくれたのは先生方や同級生の仲間達、そして家族でした。家庭では勉強している姿を見た子供から励まされる場面が何度もありました。そんな子供の姿に勇気づけられたことを今でもはっきりと覚えています。妻は同じこの学院の卒業生であり先輩でもあったことから、私の気持ちを理解してくれる1人でもありました。助言やアドバイスによって助けられたこともあります。同級生はみんな年齢も違いますが、そんなことを微塵も感じさせられることなく励まされたり、相談に乗ってもらったりと救われたことが何度もありました。先生方は時には優しく、時には厳しくと暖かく見守っていただけたと思います。私の人生においてたった2年という短い時間でしたがとても思い出が深く心に強く刻みこまれた時間でした。このように周囲の方々に見守られ、助けられて今の自分がいるのだと思います。今は医療の現場に出て辛いこともありますが、そんな時は必ず学院生活時代を思い出し初心に帰るようにしています。

砺波准看護学院が今後も沢山の有望な未来ある准看護師を育成していただけるよう願いますと同時に私も卒業生として恥ずかしくない、周囲からも認められるような看護師になりたいと思います。

「砺波准看護学院で得たもの」

49回生　**北　村　　崇**

創立50周年おめでとうございます。伝統ある砺波准看護学院で学び、多くの同志、生涯の仕事を得ることが出来たことに感謝しています。自分が感じる砺波准看護学院の良さは教員と生徒との距離感だと感じています。目的は同じでも年齢や職歴がバラバラな人間が集まれば色々な考えや思いが先走り、各々の行動をする傾向にあります。それを最終的に一つの目的、方向に導くことが教員の使命です。そこには近すぎても遠すぎてもいけない距離感が存在します。結果として49回生全員が准看護師の資格を取得し無事に卒業することができました。これは生徒一人一人の頑張りはもちろんですが教員の強力なサポート、バックアップがあったからこそだと理解しています。

その教員の中でも、どんな場面でも毅然とした態度で対応してくれる教務主任の先生には感謝と尊敬の気持ちしかありません。多分、自分は教務主任の先生とは看護並びに看護観に対する話はほとんどしていません。話の中心は人としての心構えや、立ち振る舞いなどでした。世間一般では年齢や役職で上から目線で語る方が多いですが、35歳過ぎても生意気な自分に対して教務室のソファーで「ちょっとここに座って話をしましょう」と気さくながらも真正面から真摯に意見交換をしてくれました。歯に衣着せぬ言い方しか出来ない自分に対しても「うん、あなたの言いたいことはわかった。良い時間だった。正直な気持ちを話してくれてありがとう。」と全てを受け入れてくれた器の大きさに大変驚かされました。それから、尊敬と同時に気を張ることなく接することが出来るようになりました。あの瞬間から未だに教務主任の飯波先生に対するイメージが変化する事はありません。何年後かにバッタリ会ったとしても「こんにちは。元気そうだね」といつでもあの瞬間と同じ空気で、静かに対話し頷いてくれて、様々な見解を交換しながら、浮世に対しての大きな見方の確認をしてくれそうな気がします。常に深層に着地し、しっかりと語れる人に出会えた事が、この学院生活の中での最高の財産です。なかなか得難い機会だったのだと痛感しています。

看護師とは、その器、人柄の全てが患者に対する看護に現われ、その力を感知した患者の意識を、一歩先に導く人の事だとこの学院の教員を見て学ぶ事ができました。特に目に見えない看護の力は世を巡り、その先の世界の変容に影響を与え続け、格差や人種、言葉の壁、人々の意識の革新を導く術だと思っています。人間が生き続ける限り、絶える事なく、世に在り続け、導き作用することでしょう。自分も看護師として、己の役割をしっかり果たせるように精進したいと思います。最後に

一緒に学んだ当学院の同志が頑張っている間は、より高みを目指して頑張れそうです。砺波准看護学院で学べた事は自分の誇りです。

「50周年を迎えて」

50回生　**本　村　美奈子**

50回生である2年生22名は、5月からの基礎看護実習を終え、成人老年看護実習を迎えています。6月には、研修旅行へ行き、滋賀県彦根市、彦根城周辺を散策し満喫しました。

基礎看護実習を終え、成人老年看護実習を砺波総合病院にて引き続き受けさせて頂いております。担当看護師さん、指導看護師さんより、助言や指導を頂き、多くの気付きや学びを得ると同時に、自分の中に強く刻まれ、自分独自の教訓となっていきます。

クラス22名の中で、チーム編成により、実習を受けるわけですが、これまでの授業や行事などの関わりとは違った、同チームの個々の個性の再発見をする事ができ、共有する事で、学習上の行き詰まりや、視点を変えることの大切さを学び、チーム内のつながりを深める事が出来ます。

年齢は様々で、19歳から40歳代のクラスメイトと共に、課題や記録、仕事や子育てをしながら、頑張っており、准看護学院生ならではの学院生活を送っています。

1年生の頃の授業とは違い、臨床において、解剖、疾患と、症状、病態が一連の繋がりとなって、理解することが出来る場面が増えます。実習中での失敗や経験なども、クラス全員で共有し、これからの実習や看護に生かしていけるようにと考え、気持ちを引き締めているところです。

記念すべき50周年を迎え、准看護学院が、カリキュラムを改定し、存続されている経緯を胸にしっかりと刻みながら、准看護師資格取得を目指し、学べることへの感謝をもちつつ、目標に向かい互いに各々の道を歩んでいくことが、今の私達にとって大切なことであると感じています。

「支えあるからこそ」

51回生　**堀　井　知恵子**

50周年という節目の年に、この伝統ある砺波准看護学院に在籍できたことは、私たちにとって誇りであります。

これまでに50年×人数分のドラマがあり、私たちも今、まさにバトンを持って走り始めています。

まだまだ、ひよっこの私たちは、学院のグラウンドに立ち、少しずつ前には進んでいますが、それぞれが、学校・仕事・家庭の両立に苦戦しています。同時に、周りの皆の支えがあってこそ、この舞台にいられることを実感しています。

私は今、縁あって、終末期在宅医療の仕事に携わっています。

「おうちにかえりたい」と願う人達の思いを叶え、安心して在宅で過ごして頂くために、多くの医師やスタッフが連携をとり在宅医療を支えています。

最期の日々を、住み慣れた我が家で、大好きな家族と、以前と同じ様に過ごす。そして後悔なく、自分らしく生きることは、本当に素晴らしいことです。心落ち着く環境や周囲の支えがあるからこそ、こぼれ出る「笑顔」は輝いています。そんな皆さんの笑顔は私のたからものです。

自分は、これからいったい何ができるかを見つけるため、この学院で学んでいきます。

そして支えてくださる周りの皆さんに感謝しながら、目の前にある草を1つ1つ摘んで行きたいと思います。

50周年を迎えて

教務主任　飯　波　園　栄

砺波准看護学院が50周年を迎え、月日が経つ早さに感慨深いものがあります。平成13年8月に当学院に勤務となり、翌日、臨床実習の指導の為に実習場所に緊張して出向いたことが懐かしく思い出となっております。

36回生から関わり、社会人経験者が多く、新卒の学生が3名のみでしたので戸惑いながら講義や実習指導を行ったことが甦えります。

今、振り返ってみると学生と研修旅行や学生交流会などいろいろな行事を共に過ごしてきて楽しく良い思い出となっております。

さて、平成23年3月11日に起きた東日本大震災は、歴史に残る天災でした。県からの依頼で福島県田村市の春山小学校に派遣され、6日間の滞在期間で約280名の健康管理に関わった事は、貴重な体験となり、看護職に求められているものは大きく又、地域住民により良い看護を提供できる看護職を育てていかなければと実感しました。

近年、社会情勢も変化し少子高齢化社会となり、入学生が多様化し社会人が増え社会のニーズの変化と共に歩んできました。さらに、社会のニーズに応えられ、自分で考え自分で行動できる准看護学生を育てていかなければと痛感しております。

今年、50周年という節目の年を迎え、この慶事にめぐり逢えた事に心から感謝いたします。

創立50周年をむかえて

教員　田　畑　朱　見

平成21年1月に砺波准看護学院に就職して今年で6年目を迎えた。学院創立50周年からみればほんの短い年月であるが、この期間にも多くの思い出がある。

学院での教員生活は想像をはるかに超えた世界だった。毎日が驚きの連続で、波乱万丈で楽しい。どの学生も一人ひとりに個性があり、新鮮で楽しい。冗談をかわしていても家でのおやじギャグとは違う。若さっていいなと元気をもらう。しかし世代の違う自分には理解出来ないこともあり、その時は他の先生方に力をもらい、楽しく教員生活を続けている。

仕事と家庭、学業と学生のパワーには驚くばかりである。実習にもなるとほとんどの学生は睡眠時間4時間で頑張っている。後押しせずにはいられない。学生は時には学院生活の中で涙することもあるだろうが、自分の選んだ道を突き進んでいる。素敵だなと思う。資格試験においては、プレッシャーは計り知れない。その中で努力し自分を信じ、資格試験当日に全力投球する。その集中力にも脱帽である。

授業で看護の素晴らしさを伝えられているだろうか、知識の伝達だけになっていないだろうかと、いつも自問自答しながらこれからも学生の声を受け止めながら頑張っていきたい。

出会い

教員　中田みき

砺波准看護学院創立50周年という記念すべき年を看護教員として迎えられたことを嬉しく思います。この学院に38回生として入学した頃は、看護教員として学院の教壇に立っているとは想像もしていませんでした。しかし、縁があって戻ってまいりました。

看護師になって働き始めた時「看護師は私の天職だ」と感じながら患者さんと関わっていました。現在、学生と関わる中で「看護教員こそ私の天職だ」と感じています。学生のキラキラ輝いた表情からエネルギーをもらい楽しい日々を送っています。このような日々を送っているのも今までいろんな人との巡り合わせがあったからだと思います。

思い起こせば、看護師を目指すきっかけを作ってくれたのは砺波准看護学院のクラスメイトでした。テスト前には問題を出し合ったり、臨地実習では感動したことを語り合い一緒に涙したりと知識を得ることの楽しさや看護の魅力を教えてくれました。

２年前、看護教員研修中の私は、知識や臨床経験の無さに不甲斐なさを感じ憂鬱な日々を送っていました。そんな時も仲間の他者に対する接し方や課題に取り組む姿勢などを見て自分の無いもの足りないものに気づき奮起したものです。これまでにたくさんの人と出会い、たくさんの刺激を受け現在の私がいます。

人はいくつになっても悩んだり迷ったりしながら人生を送っていくものだと思います。人生の中でいろんな人との出会いがあるでしょう。その人達と出会うことは自分にとって必然であり大切な瞬間であると思うことが大切です。落ち着いた冷静な感性を持ち周りのアドバイスを受け入れることが自分を成長させることにつながるのだと思います。そして、自分が進むべき道をしめしてくれるのではないでしょうか。

教員となった今、学生がお互いに刺激を与え合いながら各々が悩み考え成長していく場面に立ち会えることを嬉しく思います。この砺波准看護学院で、このクラスメイトと一緒に学べたことを誇りに思えるよう私も頑張っていきたいと思います。

創立50周年をむかえて

教員　岡本朱美

在職中に創立50周年をむかえることができ、光栄に思います。

平成20年11月に入職し、7年が経ちました。思い返せば43回生から49回生の127名の卒業生、そして現在学院で勉学に頑張っている50回生と51回生の学生44名の皆さんの多くの方との出会いがあったことに、改めて感慨深いものを感じます。

臨床の場から教育の場に変わり、授業や臨地実習のほか、入学式、球技大会、研修旅行、戴帽式、卒業式、新入生歓迎会、卒業生を送る会などの学校行事を通して、臨床の場では経験し得なかった多くの学びをさせていただき、そして多くの方からのご指導のもと今日があると感謝しております。

砺波准看護学院は少人数であり、学生一人ひとりと蜜に関わることができます。働きながら勉学に頑張っている姿に感心し尊敬の念を感じると同時に、大人の学生というイメージがあったのですが、学院に居るときは学生になっていることも判り、反面驚きの部分も感じ、また楽しく学生の方から力を貰っています。

学生の大切な未来に携わっていることに改めて気を引き締め、微力ではありますが尽力していきたいと思います。

第31回　砺波准看護学院戴帽式　　平成7年10月4日

第 32 回　砺波准看護学院戴帽式　　平成8年10月17日

平成７年度 31 回生

氏　名	テ　ー　マ
大山明希	急性期の総胆管結石症患者の看護
尾崎ゆき子	胃切除術後の食事療法について
片田裕子	出血性消化性胃潰瘍の術前・術後の看護について
川端一史	躁状態の患者の看護について
小口麻衣子	精神分裂病患者におけるコミュニケーションで学んだこと　―親と子の絆の大切さについて―
坂下晴美	精神分裂病患者の看護で学んだこと
笹田文恵	慢性精神分析病の水中毒看護について
平　護	ＭＤＩ患者と接して学んだこと
高野真由美	片麻痺患者の褥瘡予防について学んだこと
宝　笑里奈	ペースメーカー植込術後の患者の看護
谷田博一	糖尿病疾患の看護
幅　勝利	右下腿骨骨折の看護について
藤岡孝子	（大腿骨頸部内側骨折における）人工骨頭置換術前後の看護をして学んだ事
前川智昭	一瞬の事故で大惨事に遭ったある患者の精神的援助とかかわり
松田裕之	検査入院患者の看護
松本静枝	床上生活を送る患者の看護について
南　美秀	安静規制患者の看護
山森優子	糖尿病の退院後の生活指導について
鎧　政勝	心筋梗塞をもつ老婆と私

平成８年度 32 回生

氏　名	テ　ー　マ
青木　勲	術後直腸癌患者の看護
上田佐津希	
岸木淳子	
参納朝美	
高木春恵	大腸癌患者の看護をして学んだこと
高山和美	糖尿病の教育入院患者から学んだこと
谷中美智子	ドレナージ挿入患者の看護から学んだこと
塚本晃子	ＯＰ後ＯＴの合併症（排尿困難）の看護をして学んだこと
鳥本律子	
中島美華	片麻痺患の自立への援助をして学んだこと
藤田三季	上行結腸Ｋの疑い患者さんについて学んだこと
堀田真梨	右被殻出血患者さんについて学んだこと
本家智子	急性期の総胆管結石症患者の看護
三原喜美子	右片麻痺の患者の日常生活動作の拡大への援助をして学んだこと
宮塚昌代	脳出血による左半身麻痺の障害を持つ患者を受け持って学んだこと
宮脇美子	貧血症の患者の看護で学んだこと（個人的に援助を考える）
山本奈緒美	精神分裂病の患者さんと過ごして学んだこと
横山留美	老人の肺炎（脱水）疾患患者の看護について学んだこと
綿谷朋子	抑うつ・分裂病患者の退院前の看護を学んで
和田昌巳	

第33回　砺波准看護学院戴帽式　　平成9年10月16日

第34回　砺波准看護学院戴帽式　　平成10年10月15日

平成９年度 33 回生

氏　名	テ　ー　マ
安　念　久美子	心の病の患者さんの看護にかかわって
石　川　芳　子	結腸全摘術＋回腸直腸吻合術後の看護を実践して
猪　谷　良　子	右視床出血左半身不全麻痺患者のＡＤＬ拡大の援助について
上　出　　智	脳出血の患者の回復期看護について
川　下　稚克子	脳内出血患者さんの慢性期初期からの看護を通じた精神的援助について
北　川　美穂子	ＩＮＤＤＭ（非インシュリン型糖尿病）の「教育入院」
小　西　直　美	死を迎える患者さんの看護をして学んだこと
白　井　比登美	慢性期患者さんのでケアについて
高　野　裕　子	左視床出血患者さんの看護をして学んだこと
武　波　幸　代	右大腿骨頸部骨折患者の援助を学んで
丹　保　聡　子	左大腿骨頸部骨折患者さんの看護をして学んだこと
坪　本　悦　子	大腿骨顆上骨折を伴った老人の看護について学んだこと
松　田　有希子	慢性期に入った脳出血患者の日常生活動作の低下に対する援助と精神的援助について
南　　聡　子	胃全摘術後の経口摂取に対する援助を学んで
守　谷　多喜子	左片麻痺患者さんのＡＤＬ拡大への援助をして学んだこと
谷　内　陽　子	右片麻痺をきたした脳梗塞患者への援助を行って学んだこと

平成 10 年度 34 回生

氏　名	テ　ー　マ
上　島　理　恵	左半身不全麻痺の患者を受け持っての看護
内　山　広　志	脳梗塞患者への援助を行って学んだこと
大　坪　由紀子	右大腿骨々幹部骨折患者さんを受け持って
小　川　佐　織	脳内出血による左上下肢不全麻痺の患者さんを受け持って学んだこと
新　谷　英　和	左大腿骨頸部骨折患者さんの術後の看護について
高　桑　里　美	呼吸器疾患の患者さんを受け持って
多　田　幸　代	外傷性くも膜下出血患者のＡＤＬ拡大援助について
中　村　なぎさ	くも膜下出血患者さんの慢性期の看護
濵　口　美栄子	左片麻痺患者さんの ADL 拡大への援助をして学んだこと
廣　岡　真　弓	手術を必要とする右大腿骨頸部骨折の老人の看護
堀　田　助　好	左被殻出血患者のＡＤＬの拡大援助について
堀　田　　満	腰椎椎間板ヘルニア患者の看護について
向　井　元　司	左片麻痺をきたした脳梗塞患者への援助を行って学んだこと
村　　可奈子	脳梗塞による右半身麻痺と失語症のある患者さんを受け持って
脇　本　まり子	脳梗塞患者の意欲向上にむけての援助で学んだこと

第35回　砺波准看護学院　戴帽式　平成11年10月14日

第36回　砺波准看護学院　戴帽式　平成12年10月12日

平成11年度35回生

氏　名	テ　ー　マ
青　木　雅　司	突発性クモ膜下出血の患者
青　山　波留美	ネフローゼ症候群の患者の看護を通して学んだこと
有　澤　知佳子	左尿管結石の患者の看護について
今　井　　希	閉塞性黄疸の看護について
岩　坪　秀　洋	全盲の前立腺癌、骨転移の疑いのある患者さんの看護を行なって
大　島　　学	左下肢痛を訴える患者を受け持って学んだこと
春　日　絵　美	骨折患者を受け持って学んだこと
紺　井　久美子	左足関節開放性骨折、左踵骨骨折
佐　野　茂　樹	右下腿骨開放骨折患者の看護について
高　村　大　輔	人工股関節置換による股関節脱臼患者さんの看護について
竹　本　麻起子	右足関節三果骨折患者さんの援助をして学んだこと
中　島　智　秋	精神分裂病患者を受けもって学んだこと
長　澤　美由紀	上腕骨頚部骨折・恥骨骨折患者の看護
平　木　郁奈子	精神障害を持つ患者さんを受け持って
深　坂　幸　代	「両変形性股関節症」患者さんを受け持って学んだこと
朴　木　美　紀	肺癌による左肺下葉切除を受けた患者さんの場合
山　下　由　美	左大腿骨頚部内側骨折
松　田　浩　幸	大腿骨頚部内側骨折で人工骨頭置換術後の看護
山　森　幸　恵	クモ膜下出血の患者を受け持って
横　山　　崇	脳内出血（左被殻出血）患者さんを受け持ち学んだこと
吉　岡　真紀子	残された機能を有効に生かす方法とは？　～右片麻痺の患者さんを受け持って～
村　田　美津代	肝癌の為、肝動脈塞栓療法を受ける患者さんを受け持って
村　本　智恵美	左片麻痺をきたした、右視床出血患者への援助

平成12年度36回生

氏　名	テ　ー　マ
伊　藤　陽　子	小脳出血患者のADL拡大をめざして
石　灰　光　子	双極性感情障害（躁うつ病）のうつ状態の患者さんを受け持って
太　田　健　一	ターミナル患者への安楽についての援助
岡　島　まゆみ	急性心筋梗塞の患者を受け持って　－心臓リハビリテーションの視点から－
奥　野　恵理子	脳梗塞患者さんを受けもち学んだ事
作　井　　瞳	脳梗塞患者への糖尿病指導とリハビリ療法を通して
里　　愛　子	人工股関節置換術を受けた患者を通して学んだこと　～退院後の生活指導に努めた事例～
島　田　きよみ	小脳出血患者の看護　－褥瘡予防・意欲向上のために－
髙　柳　良　芽	長期臥床状態の小脳出血患者への働きかけ
武　田　好　美	終末期患者の援助を通して学んだこと
田　中　広　美	訴えの多い依存的状態の転換性障害患者への援助　－ADL拡大をはかる為、受容的態度で援助行為を行って－
田　中　みどり	排泄障害のある患者への援助　－自己導尿への意欲向上を目指して－
谷　澤　弘　樹	肺炎をおこした廃用症候群患者に対する援助
土　永　由美子	脳梗塞の後遺症を持つ患者の看護
出　口　良　枝	精神分裂病患者の看護　－コミュニケーションを通じて学んだこと－
中　田　早智枝	左大腿骨転子間骨折の患者を受け持ち学んだこと
林　　宣　行	病棟内での継続的リハビリ意義
室　林　大　介	躁病患者に対する関わりと援助を通して
安　田　ルリ子	糖尿病患者の退院指導を行って
山　口　理　恵	右片麻痺をを持つ患者の看護
吉　岡　敦　子	脳出血（視床出血）による片麻痺の患者への援助について　～病棟でのリハビリテーションを中心に行って～

第３７回 砺波准看護学院戴帽式記念　平成１３年１０月１８日

第３８回 砺波准看護学院戴帽式記念　平成14年10月10日

平成13年度37回生

氏　名	テ　ー　マ
稲　垣　徳　彦	転移性脳腫瘍患者を受け持って学んだこと　～嚥下障害への援助～
奥　田　千　春	躁うつ病患者を受け持って学んだこと　～精神看護における必要な援助と方向性～
片　山　四支子	腰椎すべり症の患者の看護　～生活動作の重要性を改めて考える～
川　合　朱　里	統合失調症患者の看護　～レクリエーションを通して～
木　下　正　人	脳出血（右視床出血）による片麻痺の患者への援助
木　原　千　晴	クモ膜下出血術後の日常生活を送るための指導及び援助
木　村　美　香	統合失調症の患者を受け持って　～拒否的行動を示す患者との出会いから学んだこと～
後　藤　美沙江	老年期の循環器疾患患者へのケアを振り返って　～ペースメーカー挿入術後のケアとオリエンテーション～
嶋　　佳　苗	閉塞性黄疸の患者を通して理解したこと　～精神的苦痛の軽減の援助を目指して～
田　野　　瞳	変形性頚椎症患者への握力増強への援助
堂　田　武　志	大腿部頚部骨折患者を受け持って学んだこと　～右人工骨頭置換術のリハビリにかかわって～
林　　ひとみ	左上腕骨内顆骨折患者を受け持って学んだこと　～手術後のリハビリ療法にかかわって～
深　田　和　博	慢性リウマチ患者のリハビリを通して　～ＡＤＬの拡大をめざして～
藤　村　友　紀	大腿骨頚部骨折の患者を受け持ち学んだこと　～痴呆老人とのかかわりについて～
松　田　しのぶ	慢性関節リウマチ患者を受け持って学んだこと　～左人工膝関節置換術後のリハビリにかかわって～
森　本　公三子	統合失調症患者との関わり合いの在り方　～関心度・距離間の必要性～
安　田　賢　治	転移性脳腫瘍患者を受け持って　～食欲不振患者の援助を通して学んだこと～
藪　田　　誠	心不全の患者の看護　～日常生活援助を通して学んだこと～
弓　部　哲　也	転移性脳腫瘍患者のＡＤＬの拡大をめざして

平成14年度38回生

氏　名	テ　ー　マ
池　田　　章	大きな不安を持つ患者への精神的援助を行って学んだこと
大　家　玲　子	右脛骨骨折患者を受け持って学んだこと　～整復固定後のリハビリにかかわって～
堅　田　幸　江	悪性リンパ腫瘍者を受け持って学んだ事
川　島　典　子	頚髄中心性損傷の患者を受け持って学んだ事
西　方　啓　子	脳挫傷による左片麻痺の患者を受け持って　～車椅子に座っての食事を目指して～
桜　井　竜　也	再生不良性貧血の看護　～高齢者の意欲向上とＱＯＬについて～
柴　田　裕　介	心不全の患者を受け持って　～独り暮らしの高齢者の援助と方向性～
田　上　　剛	右股関節脱臼・臼蓋骨折患者を受け持って　～禁忌動作の指導について～
武　内　善　典	慢性硬膜下血腫の患者を受け持って　～麻痺のある患者への援助～
戸　田　純　子	心不全患者を受け持って　～リハビリ療法に関わって～
中　田　み　き	脳梗塞の患者を受け持って　～リハビリの意欲向上に向けて～
中　野　正　美	肥満患者の退院後の生活をふまえての看護
深　田　　彰	視力障害を持ちながら片麻痺を患った患者との関わり
福　冨　里　子	臥床患者との関わりを通して学んだこと
本　江　裕　一	大腿骨頚部骨折の患者を受け持って　～リハビリ意欲を持つことの重要性～
松　田　亜津子	右脳被殻出血患者の看護　～受容不十分な状態での精神面での援助及びリハビリへの働きかけ～
安　田　優　華	慢性硬膜下血腫患者のＡＤＬ拡大を目指して
矢　冨　亜紀子	変形性膝関節症患者のリハビリと経過観察より学んだ事
山　口　典　子	変形性膝関節症患者を受け持って学んだ事　～術後の精神的援助にかかわって～
山　中　未沙紀	右下腿麻痺を持つ症候性てんかん患者を受け持って　～おむつからトイレでの排泄を目指して～
山　元　美　果	右下腿骨開放骨折患者を受け持って学んだ事　～術後のリハビリ療法に関わって～

第３９回　砺波准看護学院載帽式記念　　平成１５年１０月９日

第４０回　砺波准看護学院載帽式記念　　平成16年10月7日

平成15年度39回生

氏　名	テ　ー　マ
池田洋子	脳梗塞の患者を受け持って　～リハビリの意欲向上に向けて～
板倉延樹	被殻出血患者を受け持って　～麻痺と高次脳機能障害に対する援助～
伊藤　徹	片麻痺患者を受け持って
川腰知子	脳出血（視床）患者を受け持って　～意欲・自発性の低下に対する精神的援助～
齊藤奈々恵	悪性リンパ腫の患者を受け持って学んだ事
志村華奈	回復期にあるクモ膜下出血患者の援助
髙橋麻矢	大腿骨頸部骨折患者を受け持って　～リハビリに対する意欲の重要性～
髙松星子	巨大嗅窩髄膜腫の患者を受け持って　～個々の持つ日常生活の大切さ～
谷田浩美	開放骨折疾患患者を受け持って学んだ事
辻倉美智子	頚椎症性脊髄症の患者を受け持って学んだ事　～在宅復帰に向けての取り組み～
常本博晃	外傷性クモ膜下出血患者を受け持って
西田佳代	脳挫傷患者を受け持って学んだ事　～排泄の自立と気管カニューレの抜管による食事摂取にむけて～
野中　晶	左被殻出血患者を受け持って学んだ事　～リハビリ療法に関わって～
野原美津穂	脳梗塞患者を受け持って　～精神的援助に関わって～
林　かおる	左大腿骨頸部骨折の患者を受け持って
平田　薫	乳癌患者を受け持って　～乳房切除に対するリハビリと精神的援助～
福江康介	肺炎患者を受け持って学んだ事
藤田哲平	皮質下出血患者との関わりを通して学んだ事　～排泄面での改善を目指して～
松田博司	皮膚悪性腫瘍の患者を受け持って　～術後による創痛の緩和の援助～
横山理恵	肺疾患患者との関わりを通して学んだ事

平成16年度40回生

氏　名	テ　ー　マ
麻生まゆみ	心不全患者を受け持って　～在宅復帰に向けての取り組みと退院指導～
荒田真樹子	筋萎縮性側索硬化症の患者を受け持って　～予測できない疾患の進行に対する不安～
沖　久美子	筋萎縮性側索硬化症の患者を受け持って　～低下するＡＤＬに対し、取り組み学んだこと～
上川正恵	ＡＬＳ患者との関わりを通して学んだこと
神田沙織	左大腿骨頸部骨折の患者を受け持って　～高齢者の一人暮らしの在宅復帰を目指して～
木下　武	腰椎圧迫骨折の患者を受け持って　～床上安静患者への取り組み～
佐野裕子	パーキンソン病の患者を受け持って　～在宅復帰への取り組み～
髙木　光	腰椎圧迫骨折の患者を受け持って　～ギブス包帯装着中の看護で学んだ事～
常本数也	心不全患者を受け持って学んだ事
永井麻美	脳梗塞患者を受け持って　～コミュニケーションを通して学んだこと～
中嶋和美	統合失調症患者との関わりを通して学んだ事　～排泄面の援助に関わって～
鍋　宗和	右被殻出血患者を受け持って　～日常生活動作の回復を目指して～
長谷安希子	左大腿骨頸部骨折の患者を受け持って　～意欲の低下に対する精神的援助～
早川朋子	脳梗塞（ラクナ梗塞）の患者を受け持って　～理学療法・作業療法の大切さ～
稗田美幸	脳内出血（右頭頂葉皮質下）患者を受け持って
堀　真純	左大腿骨頸部骨折の患者を受け持って　～難聴と認知症に対する援助～
松代亮司	器質性精神障害患者を受け持って
水本三和子	慢性硬膜下血腫の患者を受け持って　～個々の患者に合わせた日常生活援助の重要性～
山本憲督	大腿骨頸部骨折患者を受け持って　～女性患者への援助から学んだこと～
吉田幸代	脳梗塞の患者を受け持って

第41回　砺波准看護学院載帽式記念　　平成17年10月6日

第42回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成18年10月5日

平成17年度41回生

氏　名	テ　ー　マ
池　田　千代子	誤嚥性肺炎患者を受け持って　～口腔内の清潔保持の重要性と機能向上を図って～
江　村　泰　誠	脳梗塞の患者を受け持って　～リハビリ療法・精神的援助に関わって～
大　永　慶　子	統合失調症の患者を受け持って　～長期入院患者の抱える問題～
大　橋　しのぶ	躁うつ病患者を受け持って　～意欲の低下に対する精神的援助～
桐　　香　織	脳室内出血の患者を受け持って
杉　山　吟　子	アルコール依存症の患者の看護　～心の悩み表出をめざして～
髙　橋　葉　子	左大腿骨頸部骨折の患者を受け持って　～制限されたＡＤＬと精神的援助～
髙　柳　千端佳	頚椎症性脊髄症患者を受け持って
竹　内　春　香	心不全患者を受け持って　～呼吸困難のある患者への看護～
多　田　秀　美	片麻痺患者を受け持って　～リハビリ療法に関わって～
谷　田　英　樹	大腿骨頸部骨折患者を受け持って　～術後ＡＤＬ向上を目指して～
中　藪　美由紀	在宅復帰に向けたＡＤＬの向上について　～自発性を引き出すための信頼関係形成～
松　田　清　成	骨盤骨折患者を受け持って学んだこと
水　澤　光　徳	脊髄小脳変性症患者を受け持って学んだ事　～個々の持つ日常生活の大切さ～
村　井　友　里	意欲低下がみられる患者への援助　～リハビリ療法にかかわって～
飯　　健　治	パーキンソン病患者を受け持って　～身体的、精神的援助を行って～
谷　内　晶　子	変形性股関節症の患者を受け持って学んだ事　～禁忌動作の指導について～
矢　野　江　里	脳内出血患者を受け持って　～転棟退院を目標にＡＤＬの向上～
山　下　達　也	脳出血による片麻痺患者の援助　～自力での排尿を目指して～

平成18年度42回生

氏　名	テ　ー　マ
青　木　朋　子	右被殻出血による左片麻痺患者の援助
江　川　あゆみ	大腿骨転子部骨折患者を受け持って　～術前・術後の観察～
岡　田　美奈子	脳梗塞の患者を受け持って学んだこと　～リハビリテーション療法に関わって～
片　山　理　絵	躁状態の患者の観察と傾聴の重要性
川　合　龍　生	社会復帰に向けて病識をもてるための援助　～自己抑制能力の獲得を目指して～
川　端　基予子	肺炎患者を受け持って学んだこと　～感染の予防と離床への援助～
清　原　慶　子	脳梗塞患者の退院指導について　～生活に着眼した指導の大切さ～
黒　田　敏　行	統合失調症患者を受け持って　～意欲の低下によるセルフケア不足に対する援助～
澤　武　かつ江	気分障害患者を受け持って　～自己評価の拡大をめざして～
高　橋　智恵子	乳癌患者を受け持って　～リハビリへの意欲向上に向けての取り組みと退院指導～
宝　田　奈　央	脳梗塞患者を受け持って　～在宅復帰に向けたセルフケアの向上～
田　中　克　宏	統合失調症患者を受け持って　～患者との信頼関係の形成～
中　村　幸　枝	乳癌患者を受け持って学んだこと　～ボディーイメージの変化と受容について～
沼　田　由美子	在宅復帰に向けたＡＤＬ向上に向けて　～意欲を引き出すための援助～
水　越　真津美	統合失調症の患者を受け持って　～信頼関係の形成について～
山　﨑　秀　代	統合失調症の患者を受け持って　～レクリエーション活動を通じて得た信頼関係～
吉　江　洋　子	躁うつ病患者と過活動のかかわりを通して学んだ事　～患者の活動にあわせた対応から得た信頼関係～

第43回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成19年10月4日

第44回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成20年10月2日

平成19年度43回生

氏　名	テ　ー　マ
新井裕子	統合失調症患者を受け持って　～自立した生活を目指して～
井口敬子	変形性股関節症の患者を受け持って　～患者により添う看護とは～
奥村清美	腰椎椎間板ヘルニア患者を受け持って　～禁忌動作の指導の重要性～
木村光宏	統合失調症（妄想型）の患者を受け持って　～よりよい人間関係をつくることの大切さ～
黒田香織	頸椎症性脊髄症の患者を受け持って
坂田栄治	心不全患者を受け持って　～再発防止に向けての退院指導～
佐藤優美	心不全患者を受け持って　～塩分制限の食事指導を行って～
瀬川友江	乳がん患者を受け持って　～精神的援助の大切さ～
谷口吏英	大腿骨転子部骨折患者を受け持って　～術後ＡＤＬ向上を目指して～
永井えみ	ＡＤＬ低下のある患者を受け持って学んだこと　～患者に合った援助の大切さ～
野尻イチコ	胃癌患者を受け持って　～手術から退院までの観察～
畠山美雪	誤嚥性肺炎患者を受け持って　～大好きな食事の自力摂取をめざして～
林　恵子	胃癌患者を受け持って　～術前、術後の観察～
林　史哲	腰部脊柱管狭窄症患者を受け持って　～術前、術後の観察の重要性～
平野仁美	高度３枝病変患者を受け持って　～ターミナル期にある患者の援助～
廣田真理香	変形性膝関節症の患者を受け持って　～精神面も考慮した清潔援助の必要性～
藤田英則	脳梗塞の患者を受け持って　～施設への転院に向けてのＡＤＬの維持～
藤本実歩	変形性股関節症の患者を受け持って　～手術に対する隠された不安について～
森　はるか	変形性膝関節症患者を受け持って　～リハビリ療法・清潔援助を行って～
山下麻由美	脳梗塞患者への回復期における看護　～高次機能障害患者の転落予防のための援助～

平成20年度44回生

氏　名	テ　ー　マ
荒木千賀子	高齢者の生活のリズムを考える　～音楽や昔の遊びを通して～
荒山里夏	患者の訴えに気づく看護　～脳梗塞患者を受け持って～
安藤里江	大腿骨転子部骨折骨接合術後の患者を受け持って　～安全に留意した早期離床をめざして～
石田智亜紀	統合失調症の患者を受け持って　～患者との信頼関係の形成について～
一戸直子	患者どおしの交流の効果　～術後せん妄を起こした患者を通じて～
海老正策	変形性膝関節症の患者を受け持って　～術後の安静の必要性～
老松裕美	結腸切除術後患者を受け持って　～個別性重視の援助を行って～
甲斐真弓	車椅子使用患者の転倒防止の為の一考案　～片麻痺、認知症のある患者を通して～
甲谷智子	左大腿骨転子部骨折患者を受け持って　～疼痛の強い患者への援助～
京田光司	双極性感情障害患者を受け持って　～信頼関係の形成について～
坂口美和子	病識の低い患者への服薬指導　～服薬の自己管理を目指して～
眞田由希	直達牽引にて長期臥床を余儀なくされた患者を受け持って　～患者の心理に変化をもたらした清潔援助の効果を探る～
白井大祐	転倒転落の要因を探る　～腰椎圧迫骨折の患者を受け持って～
高橋知子	大腿骨転子部骨折の患者を通して　～ＡＤＬ拡大（洗面所での洗面）に向けての援助～
武内理沙	自助具を考案し安全・安楽な看護を目指す　～人工関節置換術後の患者のニードを通して～
坪内光代	手術に不安を持った患者への精神的援助の大切さ　～頚椎症性脊椎症の患者を受け持って～
野村治美	認知症を患った脳梗塞患者に寄り添う看護　～車椅子の安全な使用法の習慣を目指して～
橋本久美子	食べこぼしによる汚染がみられる患者を受け持って　～新しく日常生活動作を取り入れ、膝掛け防水シーツを考案～
舟戸泰子	術後せん妄状態の患者への関わり方　～直腸切除術後の患者を通して～
前田美紀	高齢者の転倒予防　～転倒を起こさない安全な環境整備を行って～
牧　美由紀	右上下肢重度麻痺の患者への整容の援助　～転倒防止に注意しながら～
山田裕美	脳梗塞患者の看護　～高齢者のリハビリへの意欲を目指して～

第45回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成21年10月1日

第46回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成22年10月7日

平成21年度45回生

氏　名	テ　ー　マ
明野　希実子	退院指導に向けての援助　～腰椎脊柱管狭窄症の患者を通して～
穴田　浩美	大腿骨転子部骨折の患者を受け持って　～安全を見守るリハビリ療法へに援助～
稲葉　一郎	脳梗塞の再発作を起こした患者を通して　～患者の不安を受容する大切さ～
尾有　泉	脳梗塞患者の看護を通して　～高次機能障害患者のリハビリ意欲を引き出す～
加藤　留美	脳梗塞による右麻痺のある患者を受け持って　～患者の心理的変化に寄り添って～
金井　友美	腰椎圧迫骨折の高齢者を受け持って　～患者に合った食生活のアプローチ方法で～
川　市子	高齢患者の自宅退院に向けた離床へのはたらきがけ　～リハビリへの意欲向上を目指して～
坂口　郁子	退院に向けた服薬指導　～服薬の自己管理を目指して～
助野　政明	病識の低い高齢者の関わりを通して　～年齢に応じた説明・指導の大切さ～
中井　浩一	2型糖尿病教育入院の患者を受け持って　～高齢者だからといって～
中川　昭美	大腿転子部骨折の患者を受け持って　～術後のＡＤＬ向上を目指して～
野竹　尚子	腰椎圧迫骨折の患者を受け持って　～離床の必要性への理解不足～
廣本　香奈子	安全な離床と患者の意欲向上への援助　～頸椎骨折、中心性頸髄損傷の患者を通して～
干場　真砂	患者の自尊心に配慮した退院指導を目指して　～腰椎椎間板ヘルニア摘出術後の患者を通して～
堀　広和	高齢者・認知症のある患者の援助を通して　～コミュニケーションによる援助の大切さ～
松本　静枝	乳癌患者を受け持って学んだ事　～精神的指導の大切さについて～
松本　千晶	家庭復帰を目指してＡＤＬ向上と意欲を引き出す援助　～患者に合った援助の大切さ～
三場　律子	疼痛があり、精神面に不安を抱えた患者を通して　～腰椎圧迫骨折の患者の看護～
安元　尚由	認知症患者への援助　～意欲向上を目指して～
谷内　真理	急性冠症候群の患者を受け持って　～不安を傾聴し生活指導を行う～
山田　真世	ベッド上臥床が増えた患者との関わり方　～末期の心不全患者を受け持って～
渡辺　里沙	統合失調症患者を受け持って　～様々なレクリエーションを通して～

平成22年度46回生

氏　名	テ　ー　マ
伊藤　亜由美	終末期の肺炎患者の闘病意欲を引き出す
伊藤　順子	乳癌患者が退院に向けて意欲的だったのはなぜか？
今井　千春	大腿骨転子部骨折患者の早期離床へのアプローチ　～高齢者の意欲を引き出す家族支援～
岩倉　美香	患者に関心をもちコミュニケーションをとるということ
岩渕　昭仁	手をあてて看るということの大切さ
川合　智之	脳梗塞で失語症となった肺炎患者を受け持って　～患者の思いを引き出す関わり～
川合　奈緒美	自宅退院をめざした自立への援助
佐藤　睦美	術後高齢患者への個別性を考えた退院指導
柴田　香織	看護師の教育的機能
土部　真弓	HCUで過ごし術後せん妄をおこした高齢患者への援助
南部　安紅麻	“共に喜ぶ”姿勢の大切さ
福原　鉱平	脳梗塞患者のリハビリ意欲向上へ向けての援助
藤川　香織	相手の立場に立った看護　～安全に免荷での生活を送るための退院指導～
伏間江　美智子	乳癌手術後の患者を受け持って　～信頼関係を築く事の大切さ～
古島　由美	不安の強い患者を受容する事の大切さ　～胃癌患者の看護を通して～
松本　美智子	患者と家族が安心して生活できる退院指導とは
向井　舞	イレウス再発防止に向けての家族援助
山口　真希	思いを表出しやすい雰囲気づくり　～うつ病患者の生活の楽しみを取り入れて～
山田　暁子	仕事復帰を目指した退院指導
吉田　與博	人工骨頭置換術を行なった患者への離床

第47回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成23年10月6日

第48回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成24年10月4日

平成23年度47回生

氏　名	テ　ー　マ
石　黒　み　雪	心不全末期患者のQOL向上への援助
今　井　綾　乃	術後せん妄を起こした高齢患者の不安の受容
今　井　香　織	高齢者の自宅退院に向けた援助
上　田　　歩	看護学生の存在が患者に与えるもの
梶　谷　理　恵	慢性疾患患者が安心して生活できる退院指導を目指して
加　藤　　宏	退院指導と家族の協力の大切さ
纐　纈　佳　子	脳梗塞による左上下肢麻痺患者への食事介助
坂　田　育　子	認知症のある患者の意思・感情を引き出す援助
佐　賀　裕　子	アクティビティケアの重要性
島　倉　ひとみ	嚥下障害のある患者が安全に食事をするために
瀧　川　千　恵	糖尿病歴が長い患者への意欲を低下させない生活指導
田　辺　香世子	意思の疎通が難しい患者への嚥下機能向上に向けての関わり
土　居　真　里	高齢者の早期離床への意欲の要因
長　澤　梨　佳	拒否的態度を示す患者への褥瘡発生予防のアプローチ
長　田　和　美	ボディイメージの変化に対する援助
中　野　雅　博	視覚障害を持つ患者の恐怖心に目を向ける
野　沢　麻　衣	腰部を安静に保つ清潔への援助
平　井　真　樹	意欲的な超高齢患者の自宅退院に向けての援助
藤　森　一　歩	術前患者の精神的ケアを振り返って
別　所　千　佳	言葉の真意を考える看護
山　瀬　久美子	ボディイメージの変化の受容に向けて
渡　邊　亜沙美	一人暮らしの高齢者への個別性を考えた退院指導

平成24年度48回生

氏　名	テ　ー　マ
石　黒　紀久江	患者の心に寄り添った援助
井　端　一　雄	転倒予防における環境整備の重要性
上　田　聡　美	指導を行ううえで大切なこと
上　田　達　也	患者の言葉に傾聴し、患者の立場になって考える
大　野　広　晴	記憶障害患者へのADL向上への援助
奥　野　未　華	看護におけるコミュニケーションで大切なこと
上　口　諒　大	構音障害を持つ患者のコミュニケーション
西　郷　美　香	看護師の教育的機能
里　木　亜　貴	高齢患者の安全な離床
竹　脇　征　宣	高齢患者の離床へ向けてのアプローチ
田　畑　久　実	意思疎通が患者にもたらすもの
津　田　佳　奈	想いを表出できる関わり
冨　田　久　実	清潔援助がもたらす効果
萩　野　佳　恵	QOLの向上が人生の終焉をU氏らしく彩る
林　　なぎさ	入院生活に変化を与える大切さ
比　嘉　雅　美	高齢者に寄り添うコミュニケーション
藤　森　晴　美	患者の意欲を引き出すための援助
前　田　美智代	患者に寄り添う看護とは
吉　村　友　利	左上肢の固定患者のADLを満たす看護

第49回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成25年10月3日

第50回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成26年10月2日

平成25年度49回生

氏　名	テ　ー　マ
明　道　真智子	疼痛のある患者の離床への援助
臼　井　和　也	在宅への退院に向けた援助
纓　田　治　代	その人らしいＱＯＬを支える援助
影　近　智　里	主体的な食事指導を受けるための援助とは
川　原　智　美	排泄の自立と活動性の向上との関係性について考える
菊　地　清　子	情報収集を行うことで出来る個人的な関わり方
北　村　　崇	患者の意欲を引き出すためのコミュニケーション
三　田　祥　恵	生活リズムを整える為の援助
示　野　隆太郎	離床が患者にもたらすもの
瀬　川　寛　雄	患者の意欲を引き出す援助
曽　祢　昌　彦	傾眠傾向にある患者の看護における一考察
橋　　陸　生	高齢者のＡＤＬ低下を防ぐ援助
出　口　公弥子	在宅退院に向けての援助
東　海　浩　美	離床の障害となる安静への認識
中　谷　睦　美	安心感を与える関わり方
畠　山　志　穂	超高齢者の自宅退院にむけての心の支援
松　井　綾　華	訴えを表出できる関わりとは
水　木　武　史	手術前患者が抱える不安の受容
村　井　里　絵	高齢患者の入院生活面全体に目を向ける重要性
山　﨑　　豊	安全な食事援助を考える
山　本　磨　倫	終末期の患者の看護
湯　浅　弘　美	終末期患者がその人らしく生きるために

第51回　砺波准看護学院戴帽式記念　　平成27年10月1日

青春の思い出

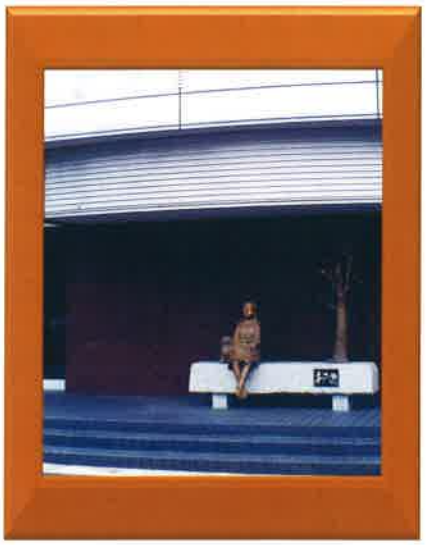
校舎

旧校舎前　10回生（昭和49年）

旧教務室

学院長室

ナイチンゲール像



名取川雅司さん作
「ある日」

記念式典・祝賀会

10周年記念祝賀会（昭和49年）

寺崎四郎先生
「女性の頭は創造の泉」

30 周年記念式典（平成７年）

入学式

祝　辞

誓いの言葉

49回生（平成25年）

卒業式

17回生（昭和58年度）

11回生（昭和51年度）

答　辞

28回生（平成５年度）

期待と不安でいっぱい！

48回生（平成25年度）

戴帽式

1回生（昭和40年）

キャンドルサービス

43回生（平成19年）

ナースキャップ授与

32回生（平成8年）

感激！！

ハンカチーフ授与

9回生（昭和48年）

女子はナースキャップ、
男子はハンカチーフが
いただけます

ナイチンゲール誓詞
唱和

48回生（平成24年）

授業・演習風景

山田泰士先生
「運動器ギプス巻き」

50回生（平成26年）

移　乗

43回生（平成19年）

演　習

10回生（昭和49年）

音　楽

27回生（平成４年）

藤井正則先生
「感染と予防」

一生懸命
ノートをとるのが
大変・・

48回生（平成24年）

シーツ交換

10回生（昭和49年）

10回生（昭和49年）

事例のまとめ発表

46回生（平成23年）

行事

交歓会

1・2回生（昭和41年）

2・3回生（昭和42年）

4・5回生（昭和44年）

文化祭

27・28回生（平成4年）

29・30回生（平成6年）

31・32回生（平成8年）

学生交流会

43回生（平成19年）

32回生（平成8年）

45回生（平成21年）

球技大会

49回生（平成25年）

47・48回生（平成24年）

研修旅行

京都

1・2回生（昭和41年）

四国松山

10・11回生（昭和50年）

平安神宮

16・17回生（昭和56年）

東尋坊

27・28回生（平成４年）

八景島シーパラダイス

28・29回生（平成５年）

妻籠宿

18・19回生（昭和58年）

横浜ベイサイドマリーナ

36・37回生（平成13年）

鳥羽グランドホテル

30・31回生（平成７年）

熱田神宮

47・48回生（平成24年）

彦根近江牛のランチ

50・51回生（平成27年）

公益社団法人砺波医師会砺波准看護学院

教育理念・教育目的・教育目標

本学院は保健師助産師看護師法に基づき准看護師として必要な知識・技術を学び豊かな人間性を養い、地域社会の医療に貢献する准看護師を育成することを目的としています。

教　育　理　念

人間は「いのち」をもち、あらゆる可能性をもった存在である。看護は人間の健康を守ることを目的とした専門職である。そのなかで、准看護師の役割は、健康障害のある人への援助を実践することである。本学院は、豊かな人間性をもち、基礎的知識・技術・態度を習得し、自主的に学ぶ姿勢をもつ准看護師を育成する

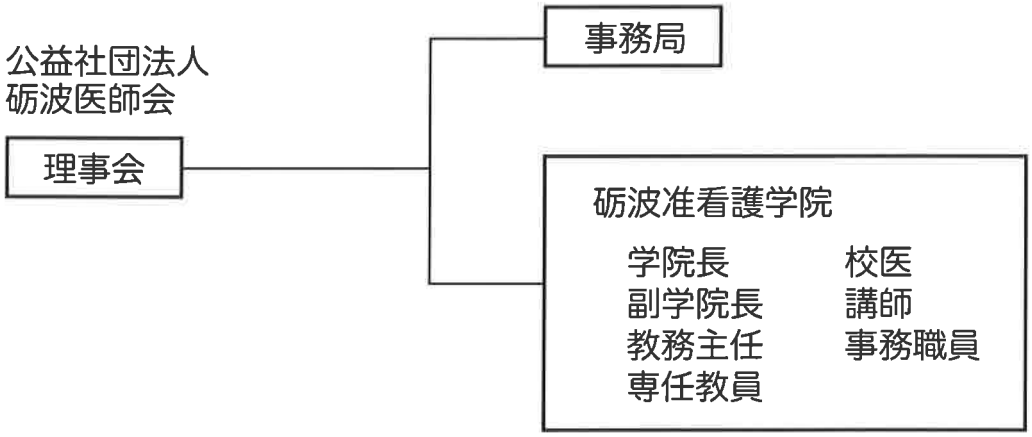
教　育　目　的

豊かな心をはぐくみ、看護に必要な知識・技術・態度を養い、社会に貢献できる准看護師を育成する

教　育　目　標

1．対象を一人の人間として理解し尊重する態度を養う
2．看護の理念を理解し、自己の看護観を育てる
3．健康障害のある人への日常生活の援助と診療の補助ができる基礎的知識・技術と態度を習得する
4．医療チームの一員として、准看護師の役割を認識し、責任を果たせるようにする
5．社会人としての教養を身につけ豊かな感性を養う
6．継続して学び続ける態度を身につける

組　織　図



職員の動向

◆ 学院長

氏　名	在任期間	備　考
初代　室生　助信	昭和40年 4 月～昭和57年 1 月	
2代　住田　宏	昭和57年 1 月～昭和61年 3 月	
3代　桐沢　奨二	昭和61年 4 月～平成 4 年 3 月	
4代　金子　豊	平成 4 年 4 月～平成12年 3 月	
5代　沼田　仁義	平成12年 4 月～平成14年 3 月	
6代　河合　康守	平成14年 4 月～平成19年 3 月	
7代　津田　達雄	平成19年 4 月～平成23年 3 月	
8代　北野　喜行	平成23年 4 月～現	

◆ 教務主任

氏　名	在任期間	備　考
三　味　かず子	昭和40年 5 月～昭和41年12月	
笠　井　かせ子	昭和41年12月～昭和53年12月	
千　葉　しづゑ	昭和54年 1 月～昭和61年 1 月	
川　崎　房　野	昭和61年 4 月～平成 6 年 7 月	
浅　田　睦　子	平成 6 年 8 月～平成19年 3 月	
飯　波　園　栄	平成19年 4 月～現	

◆ 教員

氏　名	在任期間	備　考
三　味　かず子	昭和39年11月～昭和41年12月	
笠　井　かせ子	昭和40年 3 月～昭和53年12月	
田　中　す　ゑ	昭和41年 5 月～昭和53年12月	
千　葉　しづゑ	昭和53年 4 月～昭和61年 1 月	
浅　田　睦　子	昭和53年 9 月～平成19年 3 月	
川　崎　房　野	昭和60年 4 月～平成 6 年 7 月	
大　橋　孝　子	平成 4 年 1 月～平成18年 3 月	
飯　波　園　栄	平成13年 8 月～現	(平成4年研修)
岩　井　千香子	平成18年 4 月～平成21年 8 月	
北　村　安　世	平成19年 4 月～平成20年12月	(平成19年研修)
清　水　登志枝	平成19年 5 月～平成20年12月	
毛　利　郁　子	平成20年10月～現	
宮　保　洋　子	平成20年11月～現	
岡　本　朱　美	平成20年11月～現	
田　畑　朱　見	平成21年 1 月～現	(平成22年研修)
江　守　委久代	平成22年 2 月～平成23年 3 月	
中　田　み　き	平成25年 4 月～現	(平成25年研修)

カリキュラムの変遷

乙種看護婦養成所学科課程（昭和22年）

学科目	時間数
解剖生理学	40
病理学細菌学及び消毒法	30
看護法	450
食餌療法	70
衛生学	50
衛生法規	10
調剤法	20
医療社会事業	20
家事家政	40
計	730

学科目	時間数
看護史及び看護論理	20
一般基礎看護法	100
内科疾患及び看護法	80
外科疾患及び看護法	60
小児科及び看護法	50
産婦人科疾患及び看護法	40
皮膚泌尿器科疾患及び看護法	20
眼科疾患及び看護法	10
耳鼻咽喉科疾患及び看護法	10
歯科疾患及び看護法	10
理学療法	15
試験室検査法	10
手術室勤務	15
精神病及び看護法	20
計	460

病室その他の勤務		外来勤務	
科目	週数	科目	週数
内科	8	内科	2
外科	8	外科	2
小児科	8	小児科	2
産婦人科	6	産婦人科	2
手術室	4	皮膚泌尿器科	2
調理室	4	眼科	2
精神病科	2	耳鼻咽喉科	2
		歯科	1
		精神病科	2
		その他	5
小計	40	小計	22
臨床実習総計	62週		

准看護婦教育課程（昭和26年）

学科目	時間数
解剖生理	45
細菌及び消毒法	30
個人衛生	30
食餌療法	30
薬理概論	15
疾病と健康の社会的考察	20
関係衛生法規	10
家事家政	30
一般看護法	345
計	555時間以上

一般看護法内訳	時間数	備考
看護史及び看護論理	10	
看護原理及び実際	100	
内科疾患及び看護法	80	医師による30，看護婦による50
外科疾患及び看護法	50	医師による15，看護婦による35
小児科疾患及び看護法	40	医師による20，看護法による20
産婦人科疾患及び看護法	30	医師による15，看護婦による15
精神科疾患及び看護法	25	
眼科，歯科及び耳鼻咽喉科疾患	15	
皮膚泌尿器科疾患	10	
理学療法	10	
計	345時間以上	

病室その後の勤務		外来勤務	
科目	週	科目	週
内科	16	内科	2
外科	16	外科	2
小児科	8	小児科	2
産婦人科	6	産婦人科	2
手術室	4	眼科，歯科及び耳鼻咽喉科	3
特別食調理室	4	皮膚泌尿器科	2
計	54週以上	計	13週以上

准看護婦教育課程（昭和43年）

科目		時間数
基礎科目	物理学	30
	化学	30
	生物学	30
	統計学	45
	社会学	30
	心理学	45
	教育学	30
	外国語	90
	体育	45
専門科目	医学概論	15
	解剖学	15
	生理学	15
	生化学	45
	薬理学	30
	病理学	45
	微生物学	30
	公衆衛生学	30
	社会福祉	15
	衛生法規	15
	看護学	1,620
	計	2,250

看護学内訳	時間数		
	講義	実習	計
看護学総論	135	150	285
看護概論	60		60
看護技術 総合実習	75	150	225
成人看護学	390	515	905
成人看護概論	15		15
成人保健	60		60
成人疾患と看護	315	515	830
内科疾患と看護	105	200	305
精神科疾患と看護	30	45	75
外科疾患と看護	60		
整形外科疾患と看護	30	150	240
皮膚科疾患と看護	15		
泌尿器科疾患と看護	15	30	60
婦人科疾患と看護	15	15	30
眼科疾患と看護	15		
耳鼻咽喉科疾患と看護	15	30	75
歯科疾患と看護	15		
保健所等実習		45	45
小児看護学	90	120	210
小児看護概論	15		15
小児保健	30		
小児疾患と看護	45	120	195
母性看護学	90	130	220
母性看護概論	15		15
母性保健	60		
母性疾患と看護	15	130	205
	705	915	1,620

准看護婦教育課程（平成元年）

科目		時間数
基礎科目	国語	35
	音楽	35
	外国語	35
	保健体育	35
	その他	65
	小計	205
専門基礎科目	解剖生理	70
	栄養	35
	薬理	35
	病理	15
	微生物	35
	保健医療	20
	関係法規	15
	精神保健	20
	小計	245
専門科目	基礎看護	245
	看護概論	(35)
	基礎看護技術	(175)
	臨床看護概論	(35)
	成人看護	105
	老人看護	35
	母子看護	70
	小計	455
	臨床実習	595
	基礎看護	(105)
	成人看護 老人看護	(385)
	母子看護	(105)
合計		1,500

准看護師教育課程（平成14年）

科目		時間数
基礎科目	国語	35
	外国語	35
	その他	35
	合計	105
専門基礎科目	人体のしくみと働き	105
	食生活と栄養	35
	薬物と看護	35
	疾病の成り立ち	70
	感染と予防	35
	看護と倫理	35
	患者の心理	35
	保健・医療・福祉のしくみ 看護と法律	35
	合計	385
専門科目	基礎看護	315
	看護概論	(35)
	基礎看護技術	(210)
	臨床看護概論	(70)
	成人看護 老年看護	210
	母子看護	70
	精神看護	70
	小計	665
	臨地実習	
	基礎看護	210
	成人看護 老年看護	385
	母子看護	70
	精神看護	70
	小計	735
	合計	1,400
	総合計	1,890

講師名簿一覧

基礎科目

科目＼年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
国　語	広橋　法胤		高島　實				
音　楽	金守　道子						越前　典子
英　語	安念　正義						
華　道	河合　秀子						
保健体育			川田　和美				
美　術		名取川　雅司		堀田　清			

専門基礎科目

解剖生理	藤井　正成						
	金子　豊						松　智彦
	小杉　光世						
栄　養	山本　郁夫						
薬　理	桐沢　奨二					太田　英樹	
病　理	荒川　龍夫	金井　正信					
							山下　直宏
							柳下　雅美
微生物	伏木　唯和	矢島　治				藤井　正則	
保健医療	柴田　道也					新松　正江	
関係法規	杉下　尚義					新松　正江	
精神保健	宮保　洋子						
臨床検査	前瀬　正三						

専門科目
基礎看護

看護概論	河原　信子	石崎　志津子					
基礎看護技術	浅田　睦子						
	大橋　孝子						
							飯波　園栄
臨床看護概論	浅田　睦子	大橋　孝子	浅田　睦子	大橋　孝子	浅田　睦子		大橋　孝子

成人看護

内　科	西野　章悦						
	吉田　武雄						
							柳澤　伸嘉
内科看護	境　外美子	坂東　桂子			長森　喜代子		
外　科	小林　長						
	小杉　光世						
外科看護	八田　美喜子	宮嶋　洋子		八田　美喜子	渡辺　知加江		
泌尿器科	中島　慎一						
皮　膚　科	井上　久美子			仲村　洋一			
手術室看護	天野　正美	長森　喜代子		松原　直美			宮崎　泰子
整形外科	北野　喜行						髙木　泰孝
						堀本　孝士	
整形外科看護	大島　多津美	境　外美子					古井　真知子
眼科	柴田　崇志	川口　泉		森田　嘉樹		山下　泉	
耳鼻咽喉科	河合　康守						
理学療法	堀尾　貴代美						
歯科	根尾　満	高田　保之		鈴木　功		石森　幹淑	桜木　正昭
精神科	松岡　宗里		福井　靖人				
精神科看護	作田　克喜	井上　博夫			天野　正美	河島　真美	橋詰　志津江
放射線科	角田　清志						

老人看護

老人看護	浅田　睦子					竹田　啓子	嶋田　美春
	大橋　孝子					清原　昌美	

母子看護

産婦人科	津田　達雄						
小児科	嶋　大二郎						
小児看護	松原　久代			宮嶋　洋子		松田　幸子	今井　由美子

基礎科目

科目＼年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
国　語	高島　實					正木　絹子	
音　楽	越前　典子						
英　語	安念　正義	岩崎　納子					
美　術	堀田　清						

専門基礎科目

人体のしくみと働き	小杉　光世		大和　太郎		吉田　康二郎		
	藤井　正成						
	松　智彦		高田　均		東出　慎治		
	佐伯　俊雄						
食生活と栄養	山本　郁夫						
薬物と看護	太田　英樹	新山　雅夫				舘　雅司	
		高畑　英信					
疾病の成り立ち	金井　正信						
	山下　直宏						
	柳下　雅美						中嶋　憲修
感染と予防	藤井　正則						
保健医療福祉のしくみ 看護と法律	新松　正江				藤沢　まゆみ		津田　達雄
患者の心理	宮保　洋子						
看護と倫理	浅田　睦子				飯波　園栄		
	大橋　孝子				浅田　睦子	岩井　智香子	毛利　郁子
臨床検査	前瀬　正三						

専門科目
基礎看護

看護概論	田嶋　美恵子		長岡　正子		浅田　睦子	坂東　桂子	松原　直美
	浅田　睦子				坂東　桂子	飯波　園栄	
						清水　登志枝	
基礎看護技術	浅田　睦子					飯波　園栄	
	大橋　孝子				岩井　智香子		
	飯波　園栄						北村　安世
臨床看護概論	宮崎　泰子	中川　裕美子	山田　恵美子	玉井　潤子			花島　宏子

成人看護・老年看護

呼吸器・循環器	西野　章悦	西野　一晴					
呼吸器・血液看護	長森　喜代子	中田 美代子		大野　和美		赤倉　利律子	
循環器看護				鈴木　洋子	戸田　明由	喜多　真理子	
アレルギー・膠原病・感染症	柳澤　伸嘉						
消化器・血液・内分泌・代謝	小杉　光世		大和　太郎		山下　良平		山下　良平
脳・神経							大橋　雅廣
消化器看護	山本　好美			大木　道治		村井　和美	
脳・神経看護						山本　好美	
腎・泌尿器	中島　慎一		澤田　樹佳		新倉　晋		福田　護
皮膚	仲村　洋一						
運動器	髙木　泰孝						
		山田　泰士					
運動器看護	古井　真知子	宮木　美雪			清原　昌美		浦井　清美
眼	山下　泉	豊田　葉子		藤井　茂	川口　泉	柴田　崇志	山下　泉
耳鼻咽喉	河合　康守					坂下　英雄	
女性生殖器	津田　博						
リハビリテーション	堀尾　貴代美						
歯・口腔	桜木　正昭	田守　徳樹		佐藤　英樹		澤越　豊	
放射線診療と看護	角田　清志						西嶋　博司
老年看護	嶋田　美春	片山　和子		船場　広美		山田　恵美子	
						飛口　淳子	

母子看護

母性	津田　博						
小児	嶋　大二郎	柳下　肇			住田　亮	小西　道雄	柳下　肇
小児看護	今井　由美子			五十嵐　為子	中村　財子		

精神看護

精神	福井　靖人					
精神看護	橋詰　志津栄	古井　真知子	清水　登志枝	北村　美那子		関口　佳宏

科目＼年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
基礎科目							
国　語	正木　絹子	藤井　哲夫					
英　語	岩崎　納子						
音　楽	林　典子	林原　恵子					
美　術	吉川　信一						
専門基礎科目							
人体のしくみと働き	北野　喜行						
	吉田　康二郎						
	東出　慎治				杉下　尚康		
					白石　浩一		
					清原　薫		
食生活と栄養	山本　郁夫						
薬物と看護	舘　雅司						
疾病の成り立ち	金井　正信						
	中嶋　憲修				寺畑　信太郎		
	山下　直宏		佐藤　重彦				
		能登　隆元					
感染と予防	藤井　正則						
保健医療福祉のしくみ	津田　達雄						
看護と法律	津田　達雄						
患者の心理	宮保　洋子						
看護と倫理	毛利　郁子						
	飯波　園栄						
臨床検査	前瀬　正三						
専門科目　基礎看護							
看護概論	松原　直美		中田　美代子		鈴木　洋子		鍛冶本　秀子
	飯波　園栄						
			毛利　郁子				
基礎看護技術	飯波　園栄						
	岡本　朱美						
	田畑　朱見	江守　委久代	田畑　朱見				
						中田　みき	
臨床看護概論	花島　宏子	島　美貴子	越塚　奈美		今井　真由美		近藤　江利子
成人看護・老年看護							
呼吸器・循環器	西野　一晴						
呼吸器・血液看護	一松　昭代		今井　千洋子		坂次　順子		堀田　桂江
循環器看護	喜多　真理子		伊藤　久美子		長瀬　佐知子		得永　静代
アレルギー・膠原病・感染症	柳澤　伸嘉						
消化器・血液・内分泌・代謝	山下　良平						
脳・神経	大橋　雅廣						増岡　徹
							濵田　秀雄
消化器看護	村井　和美	辻　加奈枝		西野　美千代		喜多　真理子	
脳・神経看護	林　哲子		石尾　早苗		梅基　朱美	佐藤　好美	
腎・泌尿器	村山　和夫	上村　吉穂	一松　啓介			打林　忠雄	
			上村　吉穂				
				寺島　太郎			
皮膚	仲村　洋一			湯上　徹			
運動器	高木　泰孝						
	山田　泰士						
運動器看護	浦井　清美	得永　ゆかり		松浦　優美	前川　智美		岩瀬　明美
眼	桜井　泉		山下　泉		豊田　葉子		湯浅　雅志
耳鼻咽喉	坂下　英雄						
女性生殖器	津田　博						
リハビリテーション	堀尾　貴代美	柴田　浩之					満保　紀子
歯・口腔	菅野　宏			藤岡　祐紀乃		小坂井　満	
放射線診療と看護	西嶋　博司						
老年看護	野村　昌代		北村　美那子		竹本　悦子		開発　葉子
	村端　ゆみ子		畠山　佳子		老松　紀子		中山　智美
母子看護							
母性	津田　博						
母性看護				渡邊　純子		芳里　美千留	
小児	住田　亮	小西　道雄	柳下　肇	住田　亮	小西　道雄	柳下　肇	住田　亮
小児看護	中谷　英里子		中谷・橋本		橋本　香		赤倉　利律子
精神看護							
精神	福井　靖人						
精神看護	関口　佳宏			宮川　美雪			野村　昌代

入学生・卒業生

平成 27 年 10 月末現在

回	入学年度	受験生	入学生	男子学生	卒業生
1	昭和 40	40	29	0	27
2	41	29	24	0	23
3	42	31	26	4	24
4	43	35	30	1	29
5	44	33	27	0	25
6	45	27	23	0	22
7	46	22	18	2	16
8	47	31	23	1	22
9	48	20	15	1	15
10	49	17	11	1	10
11	50	14	14	1	14
12	51	28	23	2	20
13	52	32	24	1	23
14	53	21	21	1	21
15	54	25	19	2	19
16	55	19	12	1	12
17	56	24	22	2	20
18	57	26	18	2	17
19	58	21	18	2	15
20	59	22	16	1	14
21	60	22	18	5	14
22	61	21	18	2	18
23	62	32	21	3	18
24	63	22	16	1	14
25	平成元	26	20	4	19
26	2	21	17	3	16
27	3	31	18	4	17
28	4	15	13	1	11
29	5	26	22	4	18
30	6	31	26	4	21
31	7	19	22	9	19
32	8	23	23	2	20
33	9	19	15	0	16
34	10	27	15	5	15
35	11	41	24	8	23
36	12	44	21	4	21
37	13	43	20	8	19
38	14	49	23	8	21
39	15	36	21	6	20
40	16	56	20	7	20
41	17	34	20	7	19
42	18	25	21	5	17
43	19	32	22	5	20
44	20	36	22	3	22
45	21	40	22	5	22
46	22	59	22	5	20
47	23	41	22	3	22
48	24	30	20	5	19
49	25	45	20	8	22
50	26	46	22	7	
51	27	33	22	3	

編集後記

砺波准看護学院は、地域社会の医療に貢献しうる准看護師を育成することを目的に昭和40年4月に開設し、創立50周年を迎えることになりました。

このたび、記念誌の発行にあたり、30周年から50周年までの教育・学習活動に関することをまとめ、記念誌を発行することにしました。記念誌は、平成7年に30周年記念誌を発行しており、卒業生の方々からの原稿依頼は、31回生から51回生にお願いしました。

記念誌の内容は、卒業生の方々が准看護学生時代をなつかしみ、また在校生に勇気を頂きたいと寄稿文をたくさん載せました。また、青春の写真集は1回生から51回生を載せています。旅行や文化祭・戴帽式などいろいろな写真を載せました。

さて、平成26年8月20日の広島の豪雨災害は、平成23年3月11日に起きた東日本大震災とともに歴史に残る大災害となりました。「災害看護」について本格的に学んでいる時でした。胸が痛むと同時に看護職に求められているものについて深く考えさせられました。

日本や世界の現状に目を向けて学んでいく必要性を日々感じております。

編集委員会を平成25年4月に設置し、準備委員会（同窓会）と一丸となり、 取り組み編集・発行となりました。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらず、快くご寄稿をしてくださいました諸先生、卒業生の皆様に心よりお礼申し上げます。

編集委員　飯　波　園　栄

公益社団法人砺波医師会砺波准看護学院

編集委員会

委員長	北野　喜行				
委　員	金井　正信	藤井　正則	舘　賢一	飯波　園栄	田畑　朱見
	中田　みき	岡本　朱美			
準備委員長	作田　克喜				
準備委員	片山　和子	山岸千津子	石森　典子	金井　洋子	石田　哲夫
	戸田　明由	三輪　秀秋	平桜　雅子	安田　賢治	福冨　里子

砺波准看護学院創立50周年記念誌

平成27年11月発行

発行　砺波准看護学院
砺波市幸町6－4

印刷　株式会社 吉田印刷所
砺波市表町9－1